

の夜は源右衛門を家に泊らすこゝにしたが、かねて彼女に戀慕せる磯部某といふ武士が来て、無體の戀を言ひかけた。女は途方にくれた結果、その場を免れる積りで、明日はあなたの意に従ふから、今夜は兎も角も歸つてくれと欺いて歸したのを、別室にゐた鼓の師匠の源右衛門はそれを本當のこゝ、思つて、何かの謠を口ずさんで、若し人が知つたらさうする氣か、暗に諷したの耳をしたお種は大いに驚いて、今のは全く騙すために言つたのであると辯解しても、源右衛門は此のやうな處に居るのは身の汚れだ云つて歸り仕度をする。女は騙す積りで言つた冗談でもさう云ふこゝを聞かれた以上は自分の恥だから、是非他人に話してくれるなと頼む、男は自分は言ふまいが、外から知れたらお前はさうする云ふ。斯くて「ほぎけば解くる人心、酒と色に氣も亂れ、まゝの戀なりにけり」になつて、二人の間には不義の戀が結ばれた。この事がかねてお種に意のあつた磯部某が知り、それを藩中に吹聴したので世間の評判になつた。そこへ夫の彦九郎が歸國したのである。

「さても見ごごなおつ、らや、七つ藩團に曲祿据ゑて、藩團ばりして小姓衆を乗せて、海道百里を花でやる」こんな勇しい、派手やかな歌で藩主のお供をして、一ヶ年振りに芽出度く歸つた

彦九郎は、その日に妻の不貞を罰しなければならぬやうな悲惨な憂目を見た。それは同藩の武士政山三五平に嫁してゐる實妹の忠告によつて妻の不貞を知つたからである。おたねは既に因果の胤を宿してゐる他にも確かな證據があつて、辯解の餘地はなかつた。そこで彼女は深い悔悟と充分の決心を以て自刃した。彦九郎は「妻敵を討たねば武士の面目は立たぬ」と實妹、妻の妹お藤、文六と連れ立つて京都へ出立し、祇園會の祭の日、源右衛門の住宅(堀川)に討ち入つて彼を斬り殺した。

以上は「堀川波の鼓」に描き出された経緯であるが、これには勿論近松一流の美的脚色がある。おたねは事實自殺したのでは無く、姦通したこゝを白狀して夫から刺し殺されたのであつた。妻敵討のあつたのは寶永三年六月七日で、朝の五つ過ぎであつた。「月堂見聞集」の記事に依るに、大藏彦八郎は寶永二年六月、藩主の參府の供をして江戸へ罷り下り、翌年の五月十五日鳥取へ歸るまでの留守中に、女房のお種が宮井傳右衛門と姦通したこゝが藩中に評判となり、なほ妹のく、妻の妹ふう二人も此のこゝを知つてゐたので、早速吟味するに、おたねは不義したこゝを委細に白狀したので、五月二十七日に之れを刺し殺し、同二十九日、組頭に書面を出して暇を請



ひ、藩を出で、京都に上り、六月四日着京して、妻敵傳右衛門の下立賣堀川東へ入る角に住居してゐるのを見つげ出し、同七日の朝五つ過ぎ討ちこめたことがある。

### 強姦の偽訴とヒステリー婦人

岸某(假名)といふ開業醫があつた。明治三十七年の七月より、その郷里なる越前の某町で開業してゐたが、相應に患者も多いので、間もなく近村へ出張所の一つも設けるやうになつた。處が越けて二年、三十九年の十二月に至つて、或日突然同地の警察署より呼び出しを受けた。往つて見るに、強姦の告訴が出てゐるから、一應取調べるこの署長の話である。何でも十一月の末まかに、右の出張所に来た婦人の患者を、岸が内診に托して強姦したと云ふのであつた。岸は全く身に覺わのないこゝろで、寢耳に水、何が何やら見當がつかなくつたが、兎に角署長の尋問に應じて答へるべき限りのこゝろを答へて引下がつた。しかし餘りの馬鹿らしさに、知人の人々にかくかくの次第で強姦の取調べを受けて来た處だ話すに、一同は手を打つて大笑ひをした。

處が、その年も暮れて翌四十年の一月の末、またもや岸は豫審廷に呼び出されて、今度は有夫

姦の被告として取調べを受けた。相手の女は前の時と同じ人間で、相應な農業者の妻君、年は二十八、子供も三人ある。以前警察に告訴した申條は、腦が悪くて二三回岸の診察を受けに行つてゐる中、岸は子宮病であるを稱して、ある日、強いて内診を遂げた。内診中、恥しさに両手で眼を掩うてゐたが、ちよこ様子が違ふと思つて、眼を開いて見るに既に強姦されてしまつてゐた云ふのであつた。かく告訴したものゝ、抵抗の痕跡も見わぬので不起訴になつたが、今度は改めて法廷に有夫姦の告訴を持ち出したのである。

岸はその女を診察したこゝろはあつた。しかし、婦人科醫でもなし、婦人科で使用するやうな機械を持たず、無論内診なきしたこゝろは一回もない。彼は平素品行方正で、女のこゝろに關しては昔から不具者ではないか友人から怪まれた程の人間である。然るに、診察を請ひに来た女が、内診に託して強姦したなきを訴へるのは、出鱈目を言ふにも程がある、べら棒な話だと思つてゐたしかるに驚くべし、豫審の決定は有罪となつて公判に廻された。公判はさうか云ふに、灰吹から蛇の出る譬へ、岸が初めから馬鹿にしきつてゐたこの被告事件は、公判でも有罪になつて、重禁錮八ヶ月の宣告を受けたのである。



ここに於てか、岸は俄かに狼狽して、この様子では結局どんな目に遭ふかも知れないと、一面控訴の申立をすると共に、一面に於ては俄かに證人の召喚を頼むやら、證據を集めるやら、大騒ぎに騒ぎまはつた。元來この被告事件に對する犯罪の證據と云のは、たゞ被害者たる女自身の證言ばかりで、その他には何等の證據も無いのである。しかるに運わるくも、その頃有罪判事の名高き某氏の手にかゝつて、敢なくも控訴棄却となつた。

彼は更に大審院に上告したが、これも見事に失敗した。ここに於てか彼は怨を呑んで、八ヶ月の重禁錮の冤罪に服し、獄裡の人となつたのである。

證據の甚だ不充分なるにも拘らず、岸が有罪となつたのには、平素からその筋の役人に非常に憎まれてゐた種々の事情のあつた爲めでもあらうこのことである。

岸に對して強姦の偽訴を提起し、彼をして鐵窓の人とならしめた女と云ふのは、抑々如何なる人物かと云ふに、相當の資産のある家の妻女であるから、金を強請せんがためで無いことは明かである。また岸に惚れて戀の叶はぬ意趣晴らしにやつたものでも無い。しかし、この女は名うての洒落もので、岸の出張所へ來た時も、心ゆくばかり盛裝して、來る毎に變つた着物を取替へて

ゐたと云ひ、來ては藥局の者も人妻たるものに似けなき戯談をいひかはしたと云ふことである。また今の家へ嫁がぬ以前には、随分いかゞはしい評判の立つた女だとも云ふことである。

さらに切り込んだ人の噂に依るに、彼女は某駐在所の巡査と怪しい仲であつて、ある夜、その密會の現場を本夫に見つけられた。その時言譯に困つて、口から出まかせに岸の一件を作り上げて告訴する手續きについて、件の巡査と相談中であつたか何か言譯をしたのが、抑々今回の事件の始りだとも云ふ。しかし、この女の亭主たる者の證言では、妻は佛教の篤信者で、品行方正で、夫には能く仕へ、子供には慈愛心の深いものであつたとある。

さて強姦事件に關する一件書類を調べて見るに、そのうちには強姦されたと告訴した彼女が、その當時別に聲も立てず、助けも呼ばず、また別に小言もいはずして靜かに宅へ歸つたことあり、また殊に可笑しいのは、強姦されたと自ら認めてゐながら、その日より五六日を経た後、平氣で自身藥を貰ひに來たと云ふことである。またその當時、診察室に居合はせた者は、誰一人被告岸に不利な證言を與へて居ない。さうして見るに、この女こそ誠に變な女である。何のために自己の恥も構はずに、こんな根も葉も無いことを言ひたて、人を陥れようとしたのであらうか。



満腔の怨を呑んで泣く／＼冤罪に服した岸は、苦役八ヶ月の後、娑婆に歸つて見れば、嘗て貯へてあつた一二萬の金は訴訟費用になくなつてしまひ、醫術開業免狀は取上げられて、醫師でありながら開業も出來ず、東京を去るに僅かに三十哩の鎌倉に、罪なくして配所の月をながめる身の上になつた。

以上は東京朝日新聞記者杉村楚人冠氏が、「中央公論」第二十五年第一號の誌上に「變な女」と題して掲載された事實談の要旨である。同氏は斯く叙し來つて「岸を陥れた女の心持が聞いて見たい」と結んでゐられる。成程「變な女」である。強姦されたことも無いのに、吾身の恥をも顧みず、警察や裁判所に強姦の偽訴をなして、何等の罪もない品行端正の開業醫を獄裡の人と見せしめ、恬として意に介せぬが如き、また強姦されたこと云つたその日の後、五六日たつて平氣な顔して藥を貰ひに來たが如き、さうしても謎の女である。しかし私共の立場から觀れば、別に變な女でも謎の女でも無い。

楚人冠氏の文には、彼女の來歴に關して詳細に書いてないが、しかし、その性行に徴し、また前記の偽訴事件から推察して見るに、たしかにヒステリー性の病的な女性である。

抑々ヒステリー性の婦人は、人の知るが如く感情に動かされ易く、喜怒哀樂常なく、我儘氣儘で、利己虛榮心の極めて強いものであるが、この他にヒステリー性の女は好んで虚言を吐く傾向があつて、何等の必要もなく目的もないのに、人を欺き、他を陥れる種々して、意外の捏造説虚構談を作り上げるこゝがある。法廷に於て偽證をなす女子の大部分は、大抵ヒステリー性の女である。また自身が病に罹つて醫師の診察を受ける場合にも、わざと其の病症を重く言つて見たりまた實際ありもせぬ症状を虚構して、醫師を驚かせて喜ぶやうな女も、ヒステリー性のものにて最も多く見る處である。またこの種の女性は自己にいふ觀念が甚だ強いから、美衣をつけ盛裝をこらして他人に見せびらかし、虚榮虚飾に浮身をやつすものである。但し性慾の點に至つては一定してゐない。多情な者もあれば、異性に冷淡な者もある。

さてヒステリー性の婦人が、好んで虚構無根のこゝを捏造して、人を誣ひ他を陥れるこゝに就いては、從來諸學者の之れに關する種々の報告や記述もあるが、茲にはその中の一二の例を引證して見よう。

ロンブローはヒステリーの女が、醫師を訪問して、自分はなほ純潔なる處女であるから、

強姦の偽訴とヒステリー婦人



うか結婚してくれと迫り、醜態極まる方法で相手を挑発して之れに應じなかつたので、その後、その醫師に強姦されたこと無根の言を吐き、相手に冤罪を負はしめたことを記述した。

鈴木券太郎氏はその著「犯罪論」及び「女性犯人」の中に、次の如き事例を掲げた。嘗て横濱に起つたカリュー毒殺事件の際、エー、エルと云ふ匿名の書簡が屢々領事や辯護士のもとに寄せられたが、その手紙はカリューの素行を誣ひ、實際世に存せざる婦人を虚構して、種々の無根の事柄を並べ立て、裁判官及び辯護士を始め、一般世人を欺かんとする文字を以て編まれた。そしてこの手紙の發送者は誰であらう、刑事被告人として獄裡に呻吟せるカリューその人の妻であつたのである。この夫人はヒステリー患者であつたこと云ふ。また良家の娘で、二十五歳になる未婚婦ローラーといふものが、或る僧侶に艶書を送り之れを誘惑して見たが、次いで幾許もなく、僧に汚されたことの偽訴をなしたと云ふことも載せてある。

寡婦が呼吸器病患者の看護婦に雇はれて、病人のベッドの傍に眠り、誰かに強姦されたこと妄覺し、自分を姦淫したのは患者だと思ひこんで、賠償金を請求したといふ事例もある。この女も同じくヒステリーの女であつた。

此の如くヒステリー婦人の偽訴報告は、他人が自己に對して重罪的脅迫を加へたこと云ふのが普通であつて、その罪名は大抵強姦である。この事實に就いては既にメルラック、モーレル、レグラン等の記述した處であるが、是等の原因は種々であつて、或は復讐の爲め、或は自己の淫行を隠くすため、或は故意に他人を陥れて快を叫ばんとする興味のためにやることもあるが、併し比較的が多いのは、強姦された夢や幻覺を見て、それを眞實のことに取違へるに過ぎない。

ヒステリー性の女は誣告偽訴を好んでなすの外に、常人の思惟すべからざる意外突飛の行動をなすことが少くない。ロンブローは或る富裕なる家の娘が、途中で偶然遭遇した名も知らぬ労働者を誘惑して之れに肌を汚させ、宅へ歸つて笑ひながらその由を家族に語つたことや、ある家の妻君がその夫に微毒を傳染せしめんがために、いつも街路を逍遙して微毒に罹つてゐる男子を探し尋ねたことなど記述した。また、シエーレーの説に依るに、年の若い新婚のヒステリー性婦人は密月旅行の途中、屢々旅館や料理屋のボーイの如き者と私通して逃亡したことがあること云つた。クラフト、エビングの著書に引用したギローの實驗例の如きは、實に突飛も甚だしいものである。それは或る有夫のヒステリー婦人で、一夜麻酔薬で夫を深く眠らせた後、その娘を自身



の情夫を狎戯せしめ、その醜態を傍より見物したまひふこころである。この婦人はヒステリーに罹るまでは、至つて温厚篤實なる性質であつたが、本病に罹つてよりその性質が全く一變して、恥し氣もなく他の男子に身を託して賣笑婦同様の醜行をなし、道德的觀念を失つてしまつたまひふこころである。

以上概述した如く、ヒステリーの女は氣隨氣儘で虛榮利己心が強く、虚言を弄して誣告偽訴を好み、その上にも意外突飛の醜行を演ずるので、實に厄介至極なしろ物である。孔子様が「女子小人は養ひ難し」と言はれたのは、一般の女子で無くして、特にヒステリーの女のこころを指されたのかも知れない。楚人冠氏の「變な女」に關する記事を讀むに、非常にしやれ者で美衣盛裝をなし、他人に對して人妻に似げなき卑猥な言を言ひ交したり、また結婚する迄には随分いかゞはしい悪評のあつた女だまあるが、この外にも強姦の偽訴をなした事實を參酌して見るに、この女がヒステリー性の病的な女性たるこころは最早疑ふの餘地がない。

此の如き女のために犠牲になつた岸某なる開業醫は實に氣の毒至極なものである。楚人冠氏はその文の結末に於て、岸を陥れた女の心持が聞いて見たいと言つて居られるが、しかし好んで虚

構無根の談を作り上げて、人を陥れるヒステリー性の病的な女性に如きものに、心持を聞く要はありはしない。岸を訴へた女が結婚前よりいかゞはしい風評のあつたまひひ、また駐在所の巡查と怪しい關係があつたまひふやうな點から推して見るに、多情の女であるこころが明かである。ヒステリーの女の中には多情淫奔の者も屢々認められるが、こころに相當な家の妻君で、子供の三人もありながら、巡查風情の如きものに私通するが如きは、ヒステリー婦人によくある意外突飛の行動と看すべきものである。この女が強姦の偽訴を提起して、岸醫師を陥れた動機に就いては明白でないが、恐らくは淫奔多情なるヒステリーの病的な女性に屢々認められるが如く、その興奮せる性慾のために性交の幻覺或は夢を見て、それをいつの間にか眞實のこころと錯誤した爲かも知れない。此の如き變態性慾の事實を念頭に置かずして、岸某に重禁錮八ヶ月の刑を宣告した裁判官の無理解は實に沙汰の限りである。



There is always  
Some madness in love.

餘 錄

性 研 究 斷 片

異 性 化 に 就 いて

(一)

獨逸の哲學者ワイニンゲルの説に依るに、男子或は女子の區別はあつてもその實、純粹完全なる男女が在るのでは無く、試みにMを以て理想的の男型とし、Wを以て理想的の女型とすれば、男子及び女子に於ては、M型或はW型が種々の割合にて混合するもので、M型の割合が多いか或はW型の割合が多いかに従つて男性の個體となり、若しくは女性の個體を生ずるのであると云つた。這般の所説は決して哲學者の冥想で無く、近年生物學者の新研究によつて、個體內には雌雄兩性の基質の共存すること、また一性に變化せしめ得ることが實驗的に證明せられた。

異性化に就いて



抑々雌雄男女の性徴がその生殖腺たる睪丸、卵巢の内分泌によつて喚起せらるゝことは周知の事實であるが、併し戦今の生物學的研究に依れば、固有の生殖腺以外の異性の生殖腺の基質をも兼有するものである。未だ新個體に發育せざる受精卵子に於ても既に雌雄兩性の基質の存在せることは、ゴールドシュミットが或種の蠶蛾に於て證明した處で、その一方の基質の偏勝的に發育するがために或は雌となり或は雄となることが判つた。而て近年(千九百二十三年)ハルムスは或種の蝦蟇に就て、雄を雌に變化せしむる實驗に成功した。それは此種の動物に於ては睪丸の他にビツデル氏機關 Bidderisches Organ シ云へる不全發育の卵巢の性質を有する生殖基質の共存せるからで、即ち雄性動物に就て、その睪丸を除去する時はビツデル氏機關は次第に發育して卵巢となり、またミユルル氏管の遺物よりは輸卵管が發生して、次第に雌の性徴の發現し、雄性的體質及び本能は消失して三四年間には全然雌に變化して了ふ。此の如き異性化の事實は更にクリウウが雌鶏に就て實驗した。それは從來能く産卵した雌鶏が二年間に雄鶏に變化し、若い雌鶏に交尾して仔鶏を生ませたことである。此様な實例は既に八例もあつて、之れを檢査してみれば、最も多く鳥類に於て特に善く發育完成せる左側の卵巢が結核に罹つて破壊した結果、左右兩側に遺

存せる睪丸の基質、所謂「性索」 Sexualstrang が發育を初めて遂に完全なる睪丸に發育したがためであつた。また同年ベノアは若き雌鶏に就て左側の卵巢を除去せしに、遺存せる右側の睪丸基質が發育して遂に雄鶏に變化したことを認めた。此等の實驗は、前述の動物に於ては、固有の生殖腺の他に異性の生殖腺基質が潜在し、生理的狀態の下に在ては固有の生殖腺が能く發育して内分泌機能の營まるゝがため、潜在せる異性生殖腺の基質の發育は抑制せらるゝも、若し睪丸或は卵巢が除去せられ、若くは病變に罹つてその内分泌の廢絶する時は茲に至て始めて潜在せる異性生殖腺基質が發育して異性に變化せしむることを證明したものである。但し哺乳動物に於ても異性化の惹起するか否かは、適當なる實驗動物が未だ見當らないから、今日の處では何とも明言することは出来なす。

前に述べたる如き異性化の事實は昨年十月開催のフランクフルト醫界に於てプレスラウが、「實驗的研究の現今の立場より觀たる性變調の可能に就て」 Bresslau. Ueber die Umstimmbarkeit des Geschlechts nach dem heutigen Stande der Experimentalforschung. 云々なる題目の下に購演した處であるが、人間に於ても實際上異性化の起り得ることは、病理學上明白なる事實である。そ



これは副腎皮質の腫瘍より女子が男性化すること、近時スペールマンは「婦人科及び體質研究」第十卷第二號 Archiv für Frauenkunde und Konstitutionsforschung. Bd. 10. H. 2 の紙上に「副腎皮質の性形成」 Ueber Nebennierenrinde und Geschlechtsbildung. の題せる論文を発表し、副腎皮質の増生より男性化せる女子の實例を記述した。その理由に就ては未だ明瞭でないが、クラッペーの説に依れば、胎生時に於て男性生殖腺の胚組織の一部分が同じ胚葉より發生する副腎皮質内に迷入して残存することがあるがため、若し後天的に副腎皮質の増生する場合には、その内に迷入せる睪丸組織も共に増殖して内分泌を營むにより、男子ならば性的早熟を來たし、女子ならば男性化を惹起するのである。

(二)

男子でありながら、皮下脂肪織多く、筋骨の發育弱く、乳房膨大し、その歩行状態、音聲の調子より思想感情等に至るまで女性に類し、(女性的男子 Androgyné) 或ひは女子でありながら筋骨の發育過ましく、乳房小にして骨盤狭く、音聲太く、時としては鼻下及び頤部に鬚鬣を生じ、その舉止動作も活潑にして女子の爲すべき裁縫庖厨の技を嫌ひ、好んで政治的或ひは社會的方向の

事業に没頭し、その身心共に男性に類似する者がある。(男性的女子 Gynandrier)。此の如きものを總稱して「性的變形症」Metamorphose sexualis 云々。また、男性或ひは女性の生殖腺を有しながら、その陰部の状態が他性のそれに酷似する處の假半陰陽 Pseudohermaphroditismus に於てはその第二性徴たる身體形質に於ても屢々他性の觀を具へ、男性假半陰陽者にしてその容貌、姿態、音聲、感情、思想等も女性に類し、女性假半陽者にして、同じく此等の性徴の男子に類することがある。此の如き假半陰陽及び性的變形症に於ける他性變身の原因に就いては未だ確實なる説明を下すことは出来ないが、兎に角之れに關する輒今の學説を茲に紹述し、併せて卑見をも開陳したいと思ふ。

(三)

抑々生殖腺より血液内に送致する内分泌物、即ち性ホルモン Sexualhormon が身體及び精神の兩方面に男女固有の特徴を喚起することは既知の事實である。即ち生殖腺あつて始めて男女の性徴の喚起せらるゝことは全然疑ふの餘地がない。這般の事實は夙にスタイナーの多年動物に就て研究した處で、人間に於ても、リヒテンステルンは、次のやうな實驗を世に公した。それは二十

異性化に就いて



九歳の兵士で歐洲戰亂の際、銃創を受けて兩側の睪丸を失ひたる結果、性慾は消失し、鬚髯は無くなり、身體には脂肪が増加してきたが、之れに健康人より摘出せし睪丸を移植した處、既に二週後にして性慾は回復し、六週後には、その體質も再び元の男性的状態に復した。その他、ローレエデル、クロイテル、ミーザル等も睪丸の疾患のために生殖機能を失ひ、且つその體質性格に變化を來たせし患者に睪丸の移植を試みて之れを舊態に回復せしめた實驗を報告した。

此の如く生殖腺と性徴との間には密接の關係の存するにも拘はらず、男子でありながら女性の如き形態を具へ、女子でありながら男子の如き性質に類する異常現象の往々認められるのは抑々何故であるか、また假半陰陽者は、たゞその陰部の外觀他性のそれに類似するだけで、元來は男性或は女性であるのに、その身體までが他性の外觀を呈するところのあるのは如何なる原因に基づくのであるか。此の興味ある問題を解決するに當て先づ第一に擧ぐべき事は、生殖腺以外にも性徴を支配する内分泌腺があること云ふ所説である。それは副腎であつて、女性に於て副腎の腫大しその内分泌の亢進する場合に、往々男性化を來たす事のあるのは今や疑ひなき事實として證明された。近時露國の學者ウエレンスキーは、曩時健全なりし一婦人が次第に月經の少量になつ

て遂に閉止し次で體力の強盛となり、鼻下及び頰部に鬚髯を發生し、皮膚に強く色素の沈着し、性慾も一變して同性を愛するやうに至り、最後に衰弱して死亡したものを檢査して副腎の肥大を認めたとある。此の如きもの稱し「副腎性男性化」Suprarenaler Virilismus といふ。さりながら女性的男子及び男性的女子に副腎の變化を證明するが如きことは固より稀有であるから、之れによつて悉く他性變身の原因を説明することの不可能不適當なる所以は自明の理である。またトブレイ、ホアニングは、雄鶏に甲状腺の實質を與へ雌化せしめたことを報告し、甲状腺の性徴に關與することを説いたが、併し這般の實驗は、クリユウ、ハツクスレーの研究に依るに決して確實なものでない。また之れを實際上の經驗に徴しても他性變身者の多數に甲状腺の肥大するが如き事實を證明し得られない。また生殖腺自己の腫瘍、例之は、卵巢に生ぜる黃體細胞腫より男性化を來したと云ふビンゲルの報告もあるが、併し此の如きことも固より稀有である。然るに上記の事實以外に、他性變身の原因を説明する上に於て吾人の注目すべき興味ある二種の事實がある。仍て先づ之れに就て少しく説明してみよう。

第一は眞半陰陽、即ち睪丸及び卵巢を一身に兼有する動物及び人間に於て、兩性生殖腺の二

異性化に就いて



自然に退化して消失するこゝである。這般の事實は、ザウエルベックの記述した處で、兩種の生殖腺を兼具する眞半陰陽が一性の生殖腺のみを有する假半陰陽に變化するこゝが往々ある。ピツク豚に於てクレヂートは羊に於て、眞半陰陽より假半陰陽に移行變化したこゝを解剖的に證明した。這般の事實より推測すれば人間に於て假半陰陽者の多數が男性假半陰陽であるのは、恐らくは過去に於ては眞半陰陽であつて男女兩性の生殖腺を共有して居たのが、その中の卵巢が自然に退化消失して睪丸のみが残存せしものこゝを看做しても可からう。クレヂートは現在假半陰陽者であるが、その過去は眞半陰陽者であつたらしいものを記述した。思ふに兩生殖腺の中、卵巢は異常要件の下に變性退化し易き傾向のあるもので、卵巢移植術を行つた經驗のあるものは能く這般の事實を知つてゐる。リプシユ、ツも猫及び家兎に於て行つた卵巢の移植實驗に於て、その卵巢の變性退化に陥り易きこゝを認めた。是に由て之れを觀ても、元來は眞半陰陽であつた者が、卵巢の退化によつて、男性假半陰陽に變化すべき可能性のあるこゝを肯定する事が出来る。ミツタツシユ、ブリーセル、ボロンゲネシー、は外陰部及び身體の形徴は、立派な男性であり、また、精囊輸送管、攝護腺の如き男子固有の性機關を具へてゐながら、一方には子宮及び發育不全の喇叭管

を具へ、而かも睪丸のみあつて卵巢を認めざりし實例を記述したが、蓋し此の如き者も元來眞半陰陽者であつて卵巢の變性退化を來たしたものこゝを認むべき例證である。此の如く眞半陰陽に於て特に女性生殖腺たる卵巢の退化消失し易いがために男性假半陰陽に移行變化するものがあるこゝせば、それが唯だ睪丸のみを有するにも拘はらず、その身體形質の何故に女子的性徴を呈するかこゝ云ふ疑問が起つてくる。これを説明するには、第二の問題に移らなければならぬ。

## (四)

スタイナーの說に依れば、男女兩性の生殖腺より血液内に送致する内分泌物、即ち性「ホルモン」は互ひに其の作用を異にするのみならず、相拮抗するものである(アンタゴニスムスタゴニスム)雄獸の睪丸を除去した後、雌より取つた卵巢をその體内に移植するに能くそれが保存發育して「ホルモン」を分泌し、雄獸の雌化を來たすものであるが、若し豫じめ去勢するこゝを無くして卵巢を移植し一身に雌雄兩性の生殖腺を共有せしめる場合には、雌雄兩性の「ホルモン」の拮抗作用によつて、一方の生殖腺の内分泌機能が抑制せられる。這般の學說を根據として考察を下す時はベル、ベンダ、シュミンケ、ローマイス等の報告した如き男性假半陰陽にして女性



的の體質、女性に於けるが如き乳房等をも具ふる者は、本來は眞半陰陽者であつて、前述の如く卵巢の自然に退化消失したものの、以前存在せし卵巢の内分泌によつて睪丸の内分泌の抑制せられそれがいつ迄も依然として持續するがために男子固有の性徴の現出せず、女性的形徴の殘存せるものゝ説明することも出來やう。しかし、此の如き説明は決して正確なるものゝ思はれない。近時リブシュツの實驗的研究に依れば、雄獸に卵巢を移植するに、その卵巢の内分泌は早晚消失すれども若し睪丸を除去するか或はその位置を轉せしめるか（腹腔に睪丸を轉置す）或は手術的損傷を加ふる時は移植卵巢は依然として分泌を持續しその雄獸の形質を多少なりとも變化せしめる。その理由を研究するに、若し睪丸が全然健康にして精蟲を產生する機能の完全に行はるゝ限りは移植したる卵巢は、たゞひその外觀構造の常態を保つててもその内分泌は廢絶する。然るに前記の如く睪丸の位置を轉し或は損傷を加へるに、睪丸の内分泌機能は依然行はれても、精蟲產生の作用多少なりとも隔絶せられる。是に由て之れを觀るに、睪丸の健全なる場合に移植卵巢の内分泌の廢絶する理由は次の如くに説明することも出来る。卵巢がその「ホルモン」を形成するには血液中よりそれに必要な物質を取らなければならない。處が、その物質は一方に於て睪丸の

精蟲の形成にも必要な材料である。それ故、睪丸の健全にして精蟲の盛んに產生せらるゝ場合には、その動物に卵巢を移植しても、「ホルモン」の形成に必要な物質は、睪丸より奪はれて了ふがため移植卵巢の内分泌は制止せられることになるが、之れに反して若し多少なりとも睪丸に於ける造精機能の障礙ある時は、移植卵巢は、その「ホルモン」の分泌に必要な物質を幾分なりとも攝取することも出来る。されば、睪丸と卵巢との兩生殖腺が同時に一動物體に存する時いづれか一方の腺の生殖素產生機能の多少でも障礙があれば、他方の生殖腺はその内分泌を維持繼續することが出来る譯である。そして此の如き場合に移植された生殖腺は假令ひ小さな組織片であつても、他の生殖腺の機能に障礙があれば、能く内分泌を營み得られる。されば、兩性の「ホルモン」の拮抗作用によつて一方の性「ホルモン」の分泌の抑制せられるに云ふスタイナツハの説は誤謬であつて、生殖腺の生殖素形成に必要な物質の拮抗的影響が一方の生殖腺の内分泌の抑制を來たすものゝ認めねばならない。云ふのが、リブシュツの新説である。

上述の如く一方の生殖腺の機能の減失する時は、之れと共に存在する他の生殖腺がたゞ小さな組織片に過ぎなくとも、なほ能く固有の内分泌を營み得ることが動物試験によつて證明された



如くに、人間に於ける臨牀的實驗上にも、一の生殖腺内に他性の生殖腺の小組織の含有せらるる者に於て他性變身を呈せる事實が確實に認められた。ベルの實驗した十八歳の處女は身體に毛髪が密生し、鼻下に濃い髭があり、また音聲が粗濁で、男性的形徴を呈せるものであつたに、開腹術を行つて兩側の生殖腺を摘出し、之れを精驗せしに、右側の生殖腺は普通の卵であつたが、左側の卵巢には、その内に睪丸の小組織を包含してゐた(オヴァリオテスチス Ovariotestis)。これと同様の實例はベルブリゲル及びビヅエルダンよりも報告せられた。此の如き者は固より兩性の生殖腺を共有する眞半陰陽であるが、併しその一側の卵巢内に睪丸の小組織を包含せるもので、卵巢の機能の減退障rierのためにその内にある睪丸は小さくても、能く内分泌を營み得て男性的形徴を喚起せるものと看做さねばならぬ。這般の實例より推想すれば、男性的女子、女性的男子の如き者も、その實は本當の男子或は女子に非ずして、その睪丸或は卵巢の機能の減弱せるが外に、その内に他性の生殖腺の小組織を含有せるものであるかも知れない。また假半陰陽に於ても。本來は眞半陰陽であつて、一方の生殖腺の退化に傾むく經過中に、他の一方の生殖腺の機能が多少なりとも減弱障rierを來たせしがため、全然消失せずして幾分でも殘存し、内分泌を維持繼續して

他性の形徴を喚起せるものと解釋することが出来る。たゞし生殖腺が微小なる組織であつても、なほ能く完全に性徴を喚起し得ることは、ベツアルドがに鶏就て、リップシュツツが哺乳動物に就て確證したる處である。假半陰陽は唯だ一性の生殖腺のみを有するものと認められて居るけれども、その中には他性變身の徴の明かなる者が往々ある事實に徴するに、何處かに他性生殖腺の幾分かつても殘存して内分泌を營み居るべきことが推想される。それが實際に見當らないのは、恐らくはその殘存せる他性生殖腺の微小なるがためであるかも知れない。

## 結核病者の性慾亢進の原因に 關する一考察

(一)

結核患者は身體の瘦削し、活力の沈衰するに拘はらず、獨り性慾のみ亢進發揚して房事に耽る傾向が稀でなす。所謂「結核病者の多淫」Phthisicus Salaxなる傾向は夙に世に知られた事實である。その甚だしきものは既に氣息奄々として死に垂んとするに至つても、往々なほ性慾の興奮す



るやうなこじがある。ホッフマンの法醫學書中には、結核に罹つて非常に衰弱した一農夫が、死亡する前夜迄もなほ房事を行つたといふ事實を擧げてある。私の見聞した處に依るも、或る良家の貞淑なる夫人が肺結核に罹つて某海濱地に轉地療養した處が、性慾の興奮を抑制するこじが出來ず、遂に不倫の罪を犯したこじがあり、また結核に罹つた某教師はその身分地位を顧みず花柳の巷に毎夜足を向けて、刹那の享樂を貪つてゐたこじが發覺して、教職を免ぜられたこじがあつた。此の如く男女を問はず、結核に罹患するこじ性慾が旺盛なるのは如何なる原因に基くか。之れに就いては從來種々の憶説があるが、孰れも肯定するこじが出來ない。殊に結核菌の毒素が脊髓腰部の生殖中樞に作用して之れを刺戟するがために、性慾が興奮して發情するこじが如き所説は、私より之れを観るに全然机上の空想に過ぎない。私の考察する處に依れば、結核患者に於ける性慾過敏の原因は、甲狀腺の内分泌機能の増進であらうと思はれる。這般の考察は決して空想でなく、確固たる病理學的根據があるから、之れに就いて聊か卑見を叙説したい。

(二)

抑々結核患者に甲狀腺の腫脹を來すこじは實際上疑ひなき事實で、初期の結核患者に於ても、

既に甲狀腺の軽度腫脹するこじは、ツルパンの始めて注目した處である。近時ホッフマンの記述した處に徴しても、結核に罹患した病人の四分の一に甲狀腺の腫大を認めたこじある。然らば如何なる原因機轉によつて結核病者の甲狀腺が腫脹するか。私は先づ這般の問題に就いて説明しなければならぬ。

甲狀腺の内分泌物は種々なる作用を有するが中にも、ユスチエンコーの説に依れば、身體内に於けるカルシウム及びマグネシウムの新陳代謝を減却する作用がある。處が、結核患者に於ては臨牀上の實驗に徴して明かなるが如く、尿中にカルシウムの排出せられる量が多い。換言すれば體内にカルシウムが十分に保留せられずして多量に排出せられる。これがために結核の病機は愈々増盛するこじになる。人の知るが如く、石灰工業者には結核に傳染するものが頗る稀有でありまた之れに感染してもその経過が佳良であつて、自然に治癒する傾向のあるのは、毎日絶えずカルシウムを空氣中より吸入してゐるからであつて、即ちカルシウムなる化學的物質は血管壁を稠厚にし、血液成分の滲出を抑制する作用があるから、結核病機の進行を防止し、またカルシウムは結核性病竈に沈着して之れを石灰化し、以て病機の進行を停止する役目を演ずるものであ



る。結核に對する治療法として、カルシウムを注射するのは此の如き作用を營ましめんがために外ならぬ。

處が、前記の如く、甲狀腺は體內に於けるカルシウムの代謝を減退せしめる作用を有つてゐるから、若し人が結核に罹つて、カルシウムの代謝が亢盛し、體外に排出せられる分量が多くなれば、之れに對して甲狀腺はその機能を昂めて、能ふだけカルシウムの代謝を制限し、之れを體內に保留するやうに勉めることとなる。是れ實に結核患者の甲狀腺の腫脹する所以で、即ち自然の防禦反應に外ならない。

甲狀腺の細胞の異常増殖より成る處の腫瘍、即ち實質性甲狀腺腫を患ふ者が、一般に結核に對する抵抗力強く、之れに感染することが稀であり、また之れに感染してもその經過の良好であるのは、前述の如く甲狀腺は體內に於けるカルシウムの代謝を減却する機能があるから、若しその細胞が異常に増殖して腫瘍を形成する場合に於ては、這般の機能も亢盛し、血液中に存するカルシウム量も増多するからである。それ故之れを反對に甲狀腺の機能の減弱する時は、體內に於けるカルシウムの量が減少するがため、結核に感染し易くなる。ローランドは甲狀腺の機能減弱を

以て結核發生の助因なることを認め、シャルランは甲狀腺を摘出した動物に於て、結核に對する抵抗力の著しく減退することを證明し、バンドリエ及びレーブクは甲狀腺を除去せられた患者が屢々結核に罹つて死亡することを見た。

近時ホッフマンも甲狀腺腫患者に外科的手術を施して甲狀腺を除去した後には、該患者の肺結核に罹ること多く、また潜伏結核の現出すること稀ならざること認め、妄りに甲狀腺腫を手術すべからざること説いた。

(三)

以上記述した事實は結核患者に於ける甲狀腺の腫大が、結核に對する自然の防禦反應たることを立證するものである。今から百年前に於ても、甲狀腺腫の結核に對する保護現象たることが認められてゐた。數多の統計の證示するが如く、肺結核患者に於て甲狀腺が大なり小なり程度の差異こそあれ、腫脹することの多いのは否定すべからざる事實である。然らば即ち結核患者に性慾の亢進發揚する理由の一面も、之れによつて容易に説明することが出来る。



結核病者の性慾亢進原因に關する一考察

抑々甲狀腺と生殖腺との間には相互的關係があつて、即ち生殖腺の内分泌物たるホルモンは甲狀腺の機能を催進し、また甲狀腺より分泌するホルモンは生殖腺の内分泌機能を催進する作用がある。臨牀上、甲狀腺が萎縮變性してその内分泌の減失する疾病、即ち粘液水腫に於て月經の減少消失するのは、生殖腺に作用する甲狀腺の内分泌物チレオイチンの形成が減却するがためであり、之れに反して甲狀腺の腫大する疾病、例へばバゼドウ氏病に於て月經の過多なることの多いのは、チレオイチンの内分泌が増多して生殖腺の機能を促進するがためである。されば甲狀腺内分泌の増進によつて、生殖腺のホルモンの形成も多量なる場合に、従つて性慾も同時に亢盛せざるを得ない。バゼドウ氏病患者に於て、屢々性慾が興奮して房事過度に陥り易く、その甚だしき者は淫亂症の症狀を呈することのあるのは周知の事實である。ランツの動物試験に依るに、甲狀腺を除去すれば、雌雄共に生殖能力が減退するが、若し之れに甲狀腺の有効成分を與へるに、再び生殖能力を回復するといふ事實を見ても、甲狀腺の腫大より性慾の興奮増進を來す處の理由の一面を能く解釋し得られる。近來所謂若返り法の一として、甲狀腺より製出した薬剤の使用せられるのも、要するに性慾を亢進することがその主要なる原因である。

此の如くに觀察すれば、結核病者に於ける性慾亢盛の原因が、結核に對する自然の防禦反應として起る所の甲狀腺の腫大にあることを想定することが出来る。しかし個人的素質の如何によつて、甲結腺の反應には強弱の差異があるから、同じ結核病者であつても、若し甲狀腺の防禦反應が弱く、従つて腺腫脹の度の僅微なるか或は之れが起らないものに在つては、固より性慾の亢進することは無い。

上述の事實の他なほ考察すべきことは、結核病者に於ける精神狀態の變化である。即ち結核病者に於ては、感情が旺盛になつて刺激に對する反應性が著しく過敏となり、且つ氣分が變損し易く、そして、之れと共に屢々利己的觀念が強くなり、自己を中心とする思想が増強することはワイガントの説述した處であり。またリーベは刺激に對する興奮性の強くなるかために一定の判斷力の減弱することを述べ、ハインテエルマンは結核の起る二三箇月前は神經衰弱の症狀を呈し、三箇月間持續せる發熱の後、元來の性質が一變して著しく悲觀性となり、或は泣き或は悲しむやうになつた病者のあることを記した。此の如き者があるかと思へば、他の一面には始終快活の感を有し、樂天的思想を抱くが如き者も見受けられる。しかし此の如き者の多くは病勢の進行した



もつて、グムブレヒトは重症の結核病者の五十%に於ては此の如きものを認め、ケーレルは兩肺共に重劇なる結核性變化に罹り、その咯痰の中には無數の結核菌を有し、身體の甚たしく衰弱せるにも拘はらず、常に快活の感を有する三十七歳の男子に就いて記述したことがある。

此の如く結核病患者の精神生活に異常を來すのは、結核毒素によつて腦髓に病理的變化が惹起せられるがため（ビール、ツユフレ、ウアイガント等）でもあらうが、然しまた甲状腺の精神生活に及ぼす影響も併せ考へねばならぬ。蓋し甲状腺は一に「感情腺」Glande denotion（レヴィロートシルドの命じた名稱）といふ別名があつて、その内分泌の亢進する時は精神は發揚し、感情は過敏になつて變動し易く、自制心が減退するやうになる。此の如き精神異常は甲状腺の腫大より惹起するパゼドウ氏病者に能く認められる。フランク、ホッホワルトの説に依れば、此の患者は著しく精神が發揚して、躁暴的色彩を帯びるに至ることがあり、その思想行爲も突發的なることもある。また甲状腺の常態の者でも、その内分泌が旺盛する場合には、精神は興奮し易く、感情は旺盛になつて、所謂多血質的性格 Sanguinischer Character となることは近年來醫學者の認める所で、彼のヒスタリー、神經衰弱症等の症狀の下に記述せられる精神異常、例へば些瑣

たる刺戟によつても感情の興奮し易きが如き症狀は、佛國醫學者は之れを目して「良性甲状腺内分泌亢進症」Hyperthyreoidie benigne として看做してゐる。

されば結核病者に於て甲状腺が腫大して、その内分泌の増進するがため感情の興奮發揚を來すやうになれば、性慾にも影響して同じくその興奮發揚を伴ふこともまた自明の理であらねばならぬ。之れを要するに、結核病者に於ける性慾の亢盛は腫大した甲状腺の内分泌増進によつて、一は生殖腺のホルモンの形成量の多くなるのこゝ、一は感情生活の旺盛過敏になるのこゝに因るのである。

## 全身肥滿症と性慾の減弱

### (一)

全身肥滿症の者の性慾が概して微弱なるこゝは周知の事實であつて、女子に於ては此の他に月經の來潮するこゝ無く、或はその量が僅微であり、従つて妊娠するこゝも稀である。此の如く全身肥滿症と生殖能力の障礙との間に、必至の關係ある理由を茲に論述するに當り、先づ肥滿症の



由つて起る原因を明らかにするの要がある。

全身肥満症の中、過剰の脂肪、含水炭素を攝取するがために、それが脂肪及び「クリコージン」  
として貯蓄せられるより起る所のものを食餌性或は外因性肥満症と稱する。但し、過食と云つて  
も固より個人の異なるに従つて、その食物の需要量に著しい懸隔があるから、全般を律すべき過食  
量の標準を定める譯には行かぬが、要するに個人の身體の大きさ、體重、身體の表面、勞働の度、  
及び體温の放散量に相當すべき需要食量より超つた場合は即ち過食である。さりながら、吾人の  
身體の食物を過量に攝取した場合でも、或は少量に攝取した場合でも、身體の需要に應じて酸化燃  
燒機轉を促進し或は減退して、體量の増減を一定程度まで防止する調節機能のあることを知らねは  
ならぬ。グラーフエーは動物及び人間の身體が過食の場合に於て、酸化燃燒作用が亢進して脂肪  
の過多沈着を抑止する能力あることを説き、之れを甲状腺の機能に歸した。されば、若し甲状腺  
の内分泌の減退する時は、過食から脂肪の堆積を來し、全身肥満症を惹起するやうになる。され  
ば、過食から肥満症を來すものは、甲状腺の機能のなほ生理的限界内にあつても、その比較的  
減退せるものであることを推知し得られる。それ故、過食に對する調節作用、即ち過量食物の攝

取に因る過剰の脂肪及び含水炭素の酸化燃燒を亢進して脂肪の堆積を防止することは、先づ第一  
に個人的に異なる所の甲状腺の機能に關するもので、若しその機能の生理的範圍内に於ても割合に  
強いものならば、よしや過量の食物を攝取しても容易に肥満症を惹起すること無く、或は之れを  
生ずるにしても決して著しくない。近年ローウィー及びツントは世界戦争の際、食糧不足に因る  
「戦時食」のために、身體の新陳代謝作用は著しく減退したが、體重は之れに應じて減少しなかつ  
たことを認め、身體の能く一定程度まで少量の食物に適應し、酸化燃燒を節約したことを説いた。  
そして、這般の調節作用を營むものは即ち甲状腺である。

甲状腺の機能の減退が新陳代謝を減少し、之れに反してその亢進が新陳代謝を促進することに  
は、マグヌス、レウィー及びベルグマンの研究によつて闡明せられ、過食に因る肥満症の外に、  
所謂「内因性肥満症」と稱せられる特殊の肥満症が甲状腺の機能減退から起ることは、ノールデ  
ンによつて確證せられた。しかし、前記の如く過食に因る肥満症もその根本的原因に漸れば、矢  
張り甲状腺の機能減退に起因するものであるから、これと内因性肥満症との間に嚴重なる區別を  
劃することは出来ないのは勿論である。そして、甲状腺の機能の減退を來す原因としては、種々



の傳染性、中毒性疾患やまた遺傳的關係もある。

甲状腺以外の内分泌腺、即ち生殖腺(睪丸、卵巢)、腦下垂體の疾患及び摘出よりも、肥満症を惹起するものである。

生殖腺の内分泌減失に因る肥満症を述べるに當り、先づ男女兩性の身體に於ける脂肪の生理的分布の差異に就いては少しく説かねばならぬ。思春期以前にも脂肪の分布には性的差異があつて、少女に於ては乳房と股部との脂肪が男兒よりも強く發育し、思春期以後には全身の皮下脂肪が男女に従つて特異なる發育をなすやうになる。女子に於ては乳房の他、殊に下半身、就中下腹、腰、股に脂肪が多く、男子に於ては主に上半身、殊に頸、頂、額面等に脂肪が多くなつて來る。そして、先天性に生殖腺の發育不完全なるもの、或は幼時に生殖腺を除去せられたものは、男女を問はず脂肪が増加するが、茲に興味のあるのは男女によつて著しき差異の認められることである。即ち女性に於ては皮下脂肪の分布に何等の變化を來すことなく、單に脂肪の増加するのみであるが、之れに反して男子に於ては脂肪の分布地位に變化を來し、下腹、股、乳房に脂肪の増加堆積して、女性の如き外觀を呈する。是に由つて之れを觀れば、女性に於ける皮下脂肪の分

布はその生殖腺たる卵巢の機能とは何等の關係もなく、従つて性的特徴の一と認むべきものに非ずして、畢竟するに原始的種族徴候と看做すべきものであるが、之れに反して男子に於ける皮下脂肪の分布は、生殖腺の内分泌機能から喚起せられる第二次性徴の一と認むべきものである。そして、睪丸の先天性萎縮、或は去勢から起る所の下腹、股部、乳房の脂肪堆積は「女性的脂肪堆積」と稱せられ、レウイ及びカミネルは銃創のために睪丸を失つた一男子に於て、此の種の脂肪堆積の發生を認めた。

腦下垂體を摘出した動物及びその機能障礙を來した人間に、肥満症の起ることとも周知の事實である。殊に腦下垂體の腫瘍から急に脂肪が身體、就中、上腿、軀幹に強く堆積し、同時に生殖機關の萎縮する疾病、所謂「脂肪及び生殖器性榮養障礙」と稱せられる特異の肥満症の發生すること、フレリツヒ及びバルテスによつて確證せられた。

以上説くが如く、甲状腺、生殖腺、及び腦下垂體の摘出或は疾患によつて肥満症の發生するのは、要するに内分泌の減失して脂肪の新陳代謝の減退するがためであるが、併し、茲に説明するの要あることは、脂肪の新陳代謝及び生殖機關の榮養には、特に之れを支配する特殊の中樞の存



在するところである。此の中樞は「栄養植物性中樞」を稱せられ、第三脳室底に存在するもので、アシユネルは人工的に此の中樞を傷害せしめて生殖機關の萎縮を發起せしめ、ボレイ、プレーメルは第三脳室底の人爲的階梯により、リュースは此の部の腫瘍から、スチーフレルは此の部の炎症から生殖器官の萎縮を併發した肥満症の發生するところを認めた。前記の如く脳下垂體の腫瘍から此の種の肥満症を生ずるのは、その實直接に脳下垂體の變化に因るに非ずして第三脳室底にある栄養植物性中樞の間接に障礙せられるがために外ならぬ。それは如何なる理由か云ふに、脳下垂體の中間部は此の中樞の機能を鼓舞する特殊の「ホルモン」を分泌するものであるから、若し脳下垂體に腫瘍を生じて、此の内分泌の廢絶したならば、脂肪の新陳代謝が減退し、また生殖機關の栄養障礙を來たすがため、生殖器官の萎縮を併發する肥満症を惹起するに至るのである。

以上説述する處によつて、全身肥満症の由つて起る原因が分つたならば、従つて肥満症の者の性慾の減退する理由も容易に解釋し得られる。人の知るが如く、生殖腺は特殊の「ホルモン」所謂「性ホルモン」を分泌して之れを血液中に送り、性慾を興奮發揚せしめるものである。されば、幼時生殖腺を除去せられ、或は生來生殖腺の萎縮したために起つた全身肥満症の者が、同

時に性慾の微弱にして興奮するところの無いのは自然の數であらねばならぬ。また甲状腺の内分泌機能の減退に起因せる肥満症の者に於て、同じく性慾の減退するのも生殖腺の内分泌の減失するがために外ならぬ。蓋し甲状腺は生殖腺の内分泌機能を鼓舞するものであるから、若し甲状腺の機能が弱くなれば、従つて生殖腺の内分泌も減退する譯であつて、臨牀上の經驗に徴して明かなるが如く、甲状腺の萎縮した患者、或は之れを摘出した者に於て、月經の停止し或は其の量の僅微なることは、ドイツチュ、ベル、クルシユマン、ゼンゲル等の認めた處で、その原因が生殖腺たる卵巢の機能減退にあることは言ふ迄もない。されば、此の種の患者に於ても性慾もまた微弱なるものも理の當然である。之れに反して甲状腺實質の増生腫大して、内分泌の亢進するバゼドウ氏病患者に、屢々月經過多及び性慾の亢進を來すところのあるのは、生殖腺たる卵巢の内分泌の増盛するが爲めである。されば、甲状腺の機能が弱きがために起つた肥満症の者に於て性慾の減退する理由は、之れによつて容易に説明するところ、出来る。

脳下垂體の患者、就中、腫瘍によつて發生した肥満症に於て性慾の減退するのは、肥満症と共に生殖腺の萎縮し内分泌の減却するからである。それは脳下垂體の内分泌廢絶のために、脂肪の



新陳代謝及び生殖腺の栄養を支配する栄養植物性中樞の機能の衰退するがため、肥満症と同時に生殖腺の萎縮を來すのであるから、腦下垂體の疾患に起因する肥満症に於て性慾の微弱なるのは、肥満症と直接の關係のあるのでは無く、肥満症も性慾の減失と共に腦下垂體内分泌機能に因る栄養植物性中樞の機能障りから起る處の病理的徴候である。

以上説くが如く、肥満症は甲状腺或は生殖腺或は腦下垂體の内分泌減失から起るものであるから、その原因に従つて是等内分泌腺の越幾斯を肥満症の者に注射したならば、脂肪の堆積を消失せしめると共に、性慾をも常態に恢復せしめることが出来る。

## 同性愛と睪丸移植

生殖腺より血液内に送致する内分泌物、即ち性「ホルモン」が管に男女固有の性徴のみならず性慾をも喚起するところは周知の事實である。但し此の「ホルモン」が生殖腺の實質細胞（睪丸なれば細精管の上皮細胞、卵巣なればグラフ氏細胞上皮細胞）より產生せらるゝか、或は間質細胞（睪丸なれば、ライヂツヒ氏細胞、卵巣なれば間質腺）より形成せらるゝかは、今なほ未解決の問

題であるが併し、今日多數の學者の信ずる處に依れば、生殖腺の實質細胞は生殖素たる精絲、卵子を形成する他に「ホルモン」をも分泌する機能を有し、間質細胞は何等之れに關係なき者であるに解されてゐる。兎に角、生殖腺の分泌する「ホルモン」のために性慾が喚起發揚し、異性に對する愛情の現はれるところは毫も疑ひなき處である。それ故、試みに動物に就てその睪丸を除去し卵巣を移植する時は、その動物の形質は雌化し、その性慾も變化して同性に愛情を抱くやうになり、また睪丸を除去した動物に、他の動物より取りたる睪丸と卵巣とを共に移植する時は、その動物は雌雄兩性を愛するやうになる（兩性愛 Bisexualität）此の如き事實は人間に於ても認めらるゝ處で、即ち睪丸及び卵巣を兼有する眞半陰陽者（兩性體 Hermaphroditismus）に於てはその性慾は男女いづれの方にも向ふもので、例へばシュツエーの記述せしホーマンといへるものは、男女兩性の性慾を有し、その骨盤、乳房は全く女子的であり週期性月經もあつて能く男子と交接せしが、併しまた一方にはその體質、音聲、鬚髯は共に男子に於けるが如き状態を呈し、尿道下破裂を伴へる五仙米許りの陰莖を有し、右の陰囊には睪丸を具へ、能く精液を射出して女子とも交接した。此の如き事實は一身に男女兩性の生殖腺を兼具する眞半陰陽に於て認めらるゝ處である



が、然るに一性の生殖腺のみを有する男子或は女子に於て、等しく兩性を愛し或は同性を愛するが如き性慾異常の往々認められる事のあるのは如何なる理由に因るか。その説明は今の處未だ確實なる者は無いが、併し、同性愛及び兩性愛のものに於て、その身體の性徴にも屢々異常の存する事、例へば男子にして女子に於けるが如くに身を受動的位置に置いて同性を愛好するものは、筋骨の發育弱く、皮脂肪多く、鬚髭に乏しく、音聲の調子清銳にして女性の形實に類し、その感情思想も女性的であり、また女子でありながら同性に愛情を抱く者は、筋骨の發育遅ましく、乳房骨盤の發育弱く、鼻下、頤部に往々鬚髭が發生し、月經があつても、その血量は甚だ少く、且つ言語舉動も活潑であつて男子に類するこゝ多き點より觀る時は、その生殖腺は外觀上通常のやうに見ても、その内部には他性の生殖腺の組織が幾分でも混在して居るのではあるまいかと思はれる。それは決して空想でなく、『他性變身の原因に關する學說に就て』の中にも記述したが如く、ベルの實驗した十八歳の處女は身體に毛髪が密生し、鼻下に濃厚な鬚があり、また音聲が粗濁であつて男子性形徴を具へてゐたので、開腹術を行つて兩側の生殖腺を摘出し之れを精驗せしに、右側の卵巢は普通であつたが、左假の卵巢内には睾丸の小組織を包含してゐた。これと同様

の實例は、ベルプリンゲル及びレヴェルダン等によつても報告せられた。されば、同性愛者は外觀上では男子或は女子であつても、その實は真正銘の男女ではなく、その生殖腺の内部には他性の生殖腺の小組織の混在する兩性體即ち半陰陽を認むべきものであらう。ローレデルも同性愛を以て半陰陽の特異なるものとなし、生殖腺が男女兩性の一方に向つて充分に差別化せざるがために起る處の異常であるを云つた。

スタイナーの說に依れば、生殖腺は精糸、卵子を形成する生殖部 *Generativer Teil* の第二次性徴及び性慾を喚起する發情腺 *Pubertatsdrüse* により成るものであるが、併し元來人間なるものは男女兩性の要素を兼有する兩性體であつて、胎生時代にはその發情腺内に男性の細胞たるライデッヒ氏細胞と女性の細胞たるルテイン細胞との二種を共有してゐる。さりながら將來男性に發育するものは、女性細胞が減少消失して男性細胞のみとなり、女性に發育するものにては、その發情腺内にある男性細胞が消失して女性細胞のみとなり、その内分泌物の作用によつて男女固有の性徴及び異性に對する性慾が喚起されるのである。然るに若し男子にしてその發情腺内に存する女性細胞が減少せずして、依然として發育し、そのため男性細胞の萎縮する時は男子であつ



でも、その身體の性徴及び性慾は女性的色彩を帯びて同性を愛するやうになり、また女子にしてその發情腺内の男性細胞が消失せずして依然殘存發育すれば、その形質及び精神共に男性的になり、同性を愛するやうになる云ふ。此の學説は睪丸及び卵巢内に「發情腺」なる者の存在を前提として同性愛の原因を解釋せんとするものであるが、併しスタイナーハの謂ふが如き發情腺が果して眞に生殖腺内に存在するや否やは頗る疑はしく、今日多數の學者は所謂發情腺を看做されたるライヂツヒ氏細胞、ルテイン細胞の如き間細胞は決して性ホルモンを分泌するが如き特殊の機能を有するものでなく、生殖細胞に對して營養物を供給する機關なりといひ(プラトール。ゴールドマン)或は單純なる支柱組織なり云ひ(コッホ)或は生殖細胞に對する除毒防禦裝置である云はれて居る。(ポアノ。ブクラ。コルマー等)。されば發情腺に關する所説は勿論、その内に男女兩性の性徴及び性慾を喚起する特殊の細胞が共存し、その一方の偏勝的發育によりて男子或は女子固有の性徴及び性慾が喚起せられ、また他性細胞の殘存發育によつて同性愛を惹起する云ふスタイナーハの學説の取るに足らざることは明かである。また之れを諸學者の組織學的検査の成績に徴するも、同性愛者の睪丸に於て間細胞に變化なく、その全然通常の状態にあることは既知

の事實であつて、之れに關しては、ステルベルグ、ベンゲ等の正確なる研究がある。

さりながら前述の如く、同性愛者の形質及び精神生活の屢々他性に類似する事實の上より推測する時は、その生殖腺内には他性の生殖腺の小組織が含まれて居るのではあるまいかと思はれる。これは固より解剖學的及び組織學的に證明されたのでは無いが、併しクラツベ等の云つた如く、女子の副腎内に往々睪丸組織の胚芽が迷入混在し、副腎の上皮細胞の増殖に伴うて同じく此の睪丸の生殖細胞も増殖して、女子を男性化せしめる云ふ事實や、また前記の如く、男性的形徴を呈せる一處女の一側卵巢内に睪丸組織が混在して、所譯「卵巢睪丸」Ovotestisの證明されたベルの實驗等を参照する時は、同性愛の原因は、生殖腺内に他性生殖腺組織の一部が存在し、その分泌する「ホルモン」の作用によつて性徴及び性慾が變化を來たすに因るものと認むべものである。這般の解釋の必ずしも一片の想像に非ることは、同性愛者に就て、その睪丸を除去したる後、異性愛者の睪丸を移植すること、その性慾異常が減退消失して常態となる云ふ諸學者の報告に徴して明かである。

抑々同性愛者に正常の睪丸を移植したのは、スタイナーハを嚆矢とする。彼は千九百十六年、家



系的に同性愛の遺傳質素のある女性的形徴を有せる男女を手術し、他人より取りたる一の睪丸をばその鼠蹊部の筋肉内に移植せしに、同性に對する愛慾の情は全く消失して異性を愛慕するやうになり遂に結婚するに至つた。次でスタイナーハ及びリヒテンステルンは十四人に行つた、睪丸移植の成績を蒐集綜括し、千九百二十年に之れを發表した、爾後リヒテンステルンは更に七人に就て先づ一個の睪丸を除去し正常の睪丸を移植し、ミューザムも本人の睪丸を除去して後、他の睪丸を移植して同性愛を治した事を報告した。さりながら、豫じめ同性愛者の睪丸を除去せずとも單に睪丸移植のみによりても効を奏することは、バイフェル、ローレデルの報告した處である。

睪丸移植によつて同性愛が消失しても、今日までの經驗に依れば、多くは一時的であつて、永久の効果が無い。但しスタイナーハ及びリヒテンステルンの實驗例の中には六年間も持久効果のあつた者もある、併し此の如き實例は稀有であつて、移植睪丸が早晩退化し、内分泌が廢絶して了ふがために、一時的の効果を奏するに過ぎないのである。その原因は睪丸はその構造及び血管分布状態の異なる筋肉内に移植するに因るので、若し組織的構造の近似する場所に移植したならば、睪丸は久しきに亙りて、その生活力を保有することは、スタイナーハの動物試験が之れを

證明してゐる。即ち試みに犬に就てその睪丸の傍に卵巢を移植する時は、兩者共に生存發育して「卵巢睪丸」Ovocests を形成する事實より考ふれば、睪丸内に移植すれば、永久的効果を期待することが出来る譯である。這般の考察に基づき、ローレデルは同性愛者の睪丸を除去することに、單にその一側の睪丸の一部分を切割し、その内に他人の睪丸より楔狀に切取した小片を移植した。これより先き、サンドも、家鼠及び「モルモット」に於て、その睪丸内に卵巢の組織片を移植して成功したことがある。米國の醫家スタンレイ及びカルターは監獄醫として死刑に處せられた壯年男子より直ちにその睪丸を取り移植實驗を行ひしに、勃起機能、色情の常態なることを認めた。その中にも七十二歳の老人で老著性痴呆のために小兒を凌辱したものに、死刑に處せられた壯年の印度人の睪丸を移植して、その本能を正規の状態に回復せしめることが出来た。

睪丸内に睪丸を移植することによつて性慾が常態となつた實例は尠くないが、併し子を生ませたものに關する報告に至つては今に至るまで之れを發見することが出来ない。しかし、女子に於ては、卵巢の移植後、妊娠分娩した者が無いではない。例へばモリス、ステフェンソンは一婦人に黑人の女より取つた卵巢を移植せしに、その婦人はその後、混血兒を生んだことがあり、ま



#### 同性愛と卵丸移植

た、カーナーは卵巢の移植後、妊娠分娩せし一婦人に就て報告したことがある。此の如く生殖腺を移植された者が生殖能力をも回復すること明かなる以上は、茲に法律問題が起つてくる。それは外もなでい。若し他人の卵丸の一片を卵丸内に移植されて勃起機能及び性慾の常態となつた男子が相手の女に子をませた場合、その子の父は果して卵丸の一片を切り取られた者であるか或はそれを移植された者であるか云ふ父權に關する法律問題である。しがし、之を解決することは殆んど不可能であらう。蓋し移植卵丸は小片であつても、精糸を形成する機能を具へてゐるから、精液内に無數に存在する精糸には本來の人間の精糸もあれば、他人の精糸もある故、誰の子であるかは固より分かる道理は無い。若し萬一、その子供が卵丸の一片を切り取られた者に酷似した場合には、學理上、それを父としなければならぬにしても、併し、卵丸を移植された者の側より云へば、自己の血液によつて、その移植卵丸を榮養し、以て精糸を發育せしめたのでありまた移植された卵丸は既に自己の一部となつてゐるから、たゞひ、その子供が他人の卵丸より形成せられた精糸に由來するにしても、自分の生兒として之に相續權を認めることは妥當である。さりながら同性愛及び陰萎等の治療法として卵丸移植を實際に施すことは甚だ困難なる事情が

伴つてゐる。則ち、人體自然の情として他人の卵丸を移植することは非常に不快であることがその一つ。移植用に大切な卵丸を切り取られることを承諾する者の極めて稀有なることがその二つ。そのため、手術によつて抽出された潜伏卵丸も、死刑囚より取つた卵丸も、或は類人猿の卵丸も云ふやうな者でなければ、移植材料とすることが出来ないのがその三つ。云つて、此様な者の卵丸の移植を許諒する者の殆んど絶無なることがその四つ。それ故、卵丸移植が同性愛及び陰萎等の治療法に効あるにしても、獨逸などでは今日に至る迄之れを實施したのは極めて稀である。

#### 所謂「月經毒」に關する研究

今を去ること約四年前、奥國ウィーンの學者シツクは、月經開始後二日以内の婦人が、薇薔、翁草、白菊等の花草を手握るに、半時間内にその凋萎枯稿することを認めた。這般の事實は歐洲の民俗間に傳唱せられる處であるが、シツクは之れを學術的に實驗したので、その説に依れば月經期には血液内に一種の毒物が發現し、それが皮膚の排出物たる汗液内に出るがため、月經期

所謂「月經毒」に關する研究



の婦人が草花を握るに、汗液と共に排出せられる毒物に觸れて凋萎枯稿するのである。加之、月經期の婦人の汗液をば酵母に接觸せしめるに、その醗酵作用を抑制し、或は促進し、且つコロニ（聚落）の發生を障碍するに云ふのである。(Schick, Wiener Klinische Wochenschrift, Nr. 19. 1920)

前記シツクの論文が世に公にされた後、約一年を経て、獨逸ミュンヘンの醫學者ゼンゲルは、シツクの研究を再試した成績の結果を報告した。それに依るに、月經期の婦人の月經血、靜脈血、尿等を白鼠の皮下或は腹腔内に注射しても、何等の毒作用を認めない。また月經婦人に草花を握らしめても凋萎することも無い。加之、自分の血液でも、また月經血でも、それを布片に浸して水に溶解せしめ、その來に蓮華花(さくら草)の如き草花を浸すに、二十四時間後に凋萎するが、純水内では四日間も生色を失はない事を認めた、此の如き實驗に徴して、ゼンゲルはシツクの所に反對し、特殊なる月經毒の存在を否定した。(Saenger, Zentralblatt für Gynäkologie, Nr. 23. 1921)

然るに之れに反して、フランクは月經期に際會した乳母の乳汁がシツクの實驗したが如くに、草花を凋萎する作用あることを報告した。(Frank, Monatschrift für Kinderheilkunde, Nr. 21. 1921)

此の如く月經毒の有無に關する學者の所見は千九百二十一年頃までは一定しなかつたが、千九百二十三年に至つて、シーブルグ及びバツツシユケは、精細なる藥理學的的研究法に依つて、疑問たる月經毒の本性を明かにすべく、次の如き實驗を行つたことを世に報告し、併せて月經毒の化學的性質を表示した。同氏等は月經期の女性に熱い茶を飲用せしめ、或は電氣浴を行はしめて、多量に發汗せしめ、手掌、腋窩、腹壁より排出した汗液三乃至十五瓦を採取し、それをば蛙の心臟及び家兔の小腸に作用せしめた處、その汗液の中には副交感神經を刺戟興奮する化學的物質の存在することを證明し、更にこの物質を定性分析的に研究して、レチン、Lezithinの分解産物たるコリン Cholin なることを明かにした。そして、月經の初期には、汗液内に存在するコリンの量は、月經間歇期に於けるよりも八十乃至百倍多いこと、血清内には平均八倍ほご多いことを認めた。(Sieburg u. Patzschke, Zeitschrift für experimentelle Medizin, Nr. 36. 1923)

更に昨年に至つて、マハト及びラビンは、月經の直前及びその初期にある婦人の血液中に、特殊の毒素の存在することを證明した研究成績を發表した。それはルビヌス、アルプス Lupinus albus 云々植物の種子を、普通溫度の下に水中に入れて膨脹せしめた後、それを水苔の内に移



植して發芽せしめ、三日を経てその苗を取り、コンパスを以てその長さを計つた上、それをば下記の培養液を容れた試験管の邊縁に固定せしめ、二十四時間の後、發育した苗の長さを再び計るのである。培養液は、〇・五%の硝酸加里一〇・四仙米、〇・五%の硫酸マグネシア三〇・〇仙米、〇・五%の磷酸鹽三六・〇仙米より成る混合液に水とを等分に混じたもので、この液の中に普通の血清を加へるに、苗はより早く發育成長するけれども、若し月經中の婦人の血清を加へた場合には、その發育の速度が著しく減少する。

是に由つて之れを見るに、月經期の婦人の血清中に毒性物質の存在するこゝを推知するこゝが出来来る。そしてこの毒物は管に血液ばかりでなく、皮膚の分泌物及び唾液の中にも存在するこゝである。(Macht u. Lubin, The Journal of Pharm. and exper. Therap. Nr. 6. 1924)

然るに昨年十月、ボラノー及びヂートルは、「月經期婦人の皮膚分泌物の酵母醱酵に及ぼす作用」Die Einwirkung der Hautabsonderung bei der menstruirenden auf die Hefegärung 为题する論文を發表して、特殊なる月經毒の存在を否定し、月經中には生理的に汗液内に含有する化學的物質クレアチニン Kreatinin コリン Cholin の排出量が特に増加するがために、その汗液を酵母に

觸接せしめると、その醱酵作用を抑制し、或は促進するのであると云ひ、ドイツの認めた如く、妊娠中には發汗が減退消失するこゝがあるけれども、月經期の婦人は之れに反して發汗量が多く殆んど毎常手掌の濕潤する事實を挙げ、月經期に於ては汗液の排出は増多し、従つてその内に含有する前記の化學的物質の排出せられる分量も多くなるため、下等生物に有害作用を及ぼすやうになるので、決して特殊の毒物の存在するに由るのでは無いと云つた。(Polano u. Diel, Münchener medizinische Wochenschrift, Nr. 40. 1924)

以上は月經毒に關する最近の研究を綜括したもので、果して「月經毒」といふ特殊の毒素が存在するか否か云ふ問題はなほ解決せられないのであるが、兎に角、茲に諸學者の所見を舉げて後日の參考に供するこゝにする。

## 女子の性的早熟とその原因

少女でありながら、既に生殖機關及び骨盤が發育し、恥毛腋毛も發生し、乳房も大きく、身體も比較的著しく成長して皮下脂肪に富み、性慾が發現し、月經が來潮して、妊娠分娩するが如き

女子の性的早熟とその原因



女子の性的早熟とその原因

異常現象、即ち女子の性的早熟 Menarche praecox は固より病理的であつて、此のやうなものには、往々全身肥満症、佝僂病、卵巣腫瘍等の如き他の病理的變化の伴ふところがある。私は茲に東西の文献より女子の早熟に關する若干の實例を擧げ、併せてその原因に論及したい。

コムビーが實驗した六歳二ヶ月の一幼女はその外觀恰も十四五歳の處女の如く、身長は一米突十八に達し、乳房は充實して圓く且つ硬く、胸圍は七十二仙米を算し、陰阜は毛を以て被はれ、既に二歳の頃より規則正しく月經の來潮せるものであつた。ダイヤモンドが見たものは六歳の幼女で、七十九ポンドの體重を有し、その臀、股、乳房は、成熟した婦人に於ける如く發育し、恥毛、腋毛を發生し、二歳以來月經を通じ、月經はいつも四日間持續した。ビエツトが實驗した早熟女兒は四歳より月經が始まり、身體も既に發育してゐた。ゲルバルドが文献より蒐集した五十四例の早熟女性の統計に依れば、月經が始めて來潮した年齢は實に左記の如くである。

初生兒	生後二週
一 人	一 人
二 月 一 人	三 月 一 人
四 月 一 人	五 月 一 人

七 月 一 人	九 月 四 人
十 月 二 人	一 年 五 人
十五 月 一 人	十六 月 一 人
十八 月 二 人	十九 月 一 人
二十二 月 一 人	二 年 四 人
二年 六 月 一 人	二年 九 月 一 人
三 年 六 人	三年 六 月 一 人
四 年 四 人	四年 三 月 一 人
五 年 一 人	五年 六 月 一 人
六 年 一 人	六年 六 月 一 人
七 年 三 人	九 年 二 人
十一年 六 月 一 人	

此の統計にある早熟女兒の多數は、月經が起るに先だつて既に乳房が發育し、身體も發育成長  
女子の性的早熟とその原因



女子の性的早熟とその原因

して皮下脂肪に富み、歯牙も早くより永久歯が発現した。しかし、精神の發育は身體の發育に伴はなかつた。

近時トームスが實驗した三歳十一ヶ月の女兒は、生殖機能が充分に發育し、月經を通じ、乳房は成熟した婦人に於けるが如くであつた。一歳の折既にその乳房が普通の幼兒に比して大きかつたことは、その父の注目を惹いた程であつた。三歳七ヶ月より月經があつて四日間持續し、その後六週にして第二回の月經を來し三日間持續した。第三回の月經はその後三週にして起つたが、それより八週間、月經が缺如した後、三日間またも經血を見た。恥毛は可なり多數に生じて陰阜を掩うてゐるが、腋毛は無い。精神の發育は生殖機關及び身體の發育に伴はず、精神上より見た年齢の程度は三歳六ヶ月に相當してゐた。

性的早熟の女兒は早くより異性に接して、妊娠分娩するこゝが尠くない。モントゴメリーは既に一歳より月經の始まつた一幼女が十歳で分娩したのを見、ゾトレボルは九歳より月經の來潮した一幼女が、その後間もなく妊娠したのを見た。ハルレルが記述したものは、既に分娩の際恥毛が発生し、二歳にして月經があらはれた者であつたが、九歳にして子を産んだ。モリトールは四

歳にして月經が來潮し、八歳にして異性に接し、九歳にして分娩したものを記述し、カルスは二歳にして月經を來し、三歳にして恥毛及び乳房の發育したものが、八歳で妊娠したのを見た。マランチは米國に於て、二十六歳にして既に祖母となつた一婦人のあつたこゝを記し、ランチエは希臘に於て二十五歳の婦人で、十三歳の娘を有つてゐるものを記した。

上記の諸例はいづれも醫家の實驗したものであるが、史乘及び雜書に於ても、幼女が妊娠分娩した記事を見出すこゝが必ずしも稀有でない。先づ支那に於ける載籍より這般の記録を挙げれば「南史」に「張麗華、初事襲貴嬪、方十歳後主見而悅之、因得幸、遂有妊」<sup>二</sup>とあつて、十歳にして妊娠した幼女のあつたこゝを記し、「輟耕錄」には「松江民蘇達郷女年十二、贅浦仲之子、爲婚、明年生一子」<sup>二</sup>とあつて、十二歳にして結婚し、十三歳にして分娩した少女のあつたこゝが記されてゐる。我國には「松屋筆記」に、「和州諸將軍傳に、永祿七年甲子春三月、丹波國にして七歳の小女子を産む。これ世を擧げて天下の惟異なり云ふ。(中略)文化年中にも、下總國佐倉近邊にて、七八歳の女子産せるこゝあり」<sup>二</sup>と見ゆ、「宮川舍漫筆」に「文化九壬申年、九月十一日、御屆之寫、常陸國築波郡城中村、百姓忠兵衛次男忠藏儀、水戸街道、下總國相馬郡土浦領藤代宿



女子の性的早熟とその原因

酒屋伊平次方に杜司を相勤む。同宿の百姓に久右衛門叔母かな、娘よのも右伊平次方に相勤め罷り在るうち、密かに夫婦に可相成約束いたし、兩人とも暇まり夫婦になり、八年巳前娘出生いたし、みや名づけ養育いたし候處、右みや儀、四歳の頃より月々經水通じ候につき、不思議に存じ候うち、當正月頃より經水留り、當四月頃より懐胎にも可有之哉の體に相見候へきも、小兒の儀につき妊娠致すべき様無之、兩親並びに近所の者まで如何やうなる奇病にも可有之哉、安心仕り難く、筑波郡濱田村醫師内藤道因は産科の功者承り及び候につき、相招き診察致させ候處、妊娠相見候、殊更經水の留りし上は多分相違有之間敷申候へきも、十歳以下の小兒の儀につき、醫師の診断も信用なり難く、處々にて占はせ候處、狐狸の所爲にも可有之なき申す者も御座候うち、相馬郡の内、矢原村、大工峰藏申す者に占はせ候處、妊娠に相違なく、こゝに男子の由申す。かれこれ致し候うち、月を重ね候に従ひ、胎内にて動き候故、いよく懐胎に相見候處、當申九月三日、卯の上刻、小用に罷り越し、伏床へ歸り候に直ちに安産、男子出生致し候、尤もその砌より乳汁澤山にて出生の男子にたべさせ、母子とも丈夫に肥ね立ち申候云々」こゝある。「兎園小説」には、この早熟女兒みやなる者のこゝを記して、「年頃より大柄に相見候」こゝ

ひ「一話一言」には「みやは十歳ばかりの姿に見ゆ、行狀は小女に遠ふこゝなし。乳房は大人の如し」こ記してある。是等の記事を綜合すれば、みやは既に四歳の頃より月經を通じ、乳房も早くより發育し、七歳で妊娠し、八歳で分娩したのであるが、しかし精神の發育のみは依然として小兒であつた。なほ幼女分娩の一史實には、「南方紀傳」に「享徳三年、春、伊勢子良子、十歳而妊生子」こいふ記録がある。

性的早熟の原因は、男兒に於ては大脳と小脳との間に介在する松葉腺に腫瘍が生じ、内分泌機能が廢絶するより起るもので、即ち松葉腺は小兒時代に於て生殖機關の發育を抑制する機能を擔任する内分泌腺であるから、若しそれに腫瘍が発生して、腺實質が破壊せられる時は、内分泌機能が廢絶するため生殖機關が早期に發育成熟するのである。しかし、これは男兒に於て認められる處で、クルシユマン等は女兒には此の如きこゝは無いと云つてゐる。然らば幼女に於ける性的早熟は如何なる病理的原因に基づくか云ふに、それは主として卵巢の腫瘍に基因するのである。蓋し卵巢の實質たる臙胞上皮細胞が異常に増殖する結果、性ホルモンが早期より多量に内分泌せられるがため、内外生殖機關の發育を促進し、第二性徴を喚起するに因るのである。クツ

女子の性的早熟とその原因



女子の性的早熟とその原因

スマウル及びホフマイエルは、卵巢の變化を以て性的早熟の原因たることを證明したが、殊にホフマイエルは五歳の早熟女兒に於て、その卵巢腫瘍を除去した處、月經は閉止し、また剃去せる恥毛が再び發生しないことを認めた。近時ピンツも二歳の早熟女兒に於て、その卵巢の悪性腫瘍が早熟の原因であつたことを、そしてこの腫瘍の液汁を雌獸に注射した處、子宮が著しく發育して倍大の容積に達したことを報告した。なほ副腎の腫瘍よりも性的早熟を來すことがある。(リンゼル)

然るにまた他の一面に於ては、生殖機關が未だ發育せずして、全然小兒狀態なるに拘はらず、獨り性慾のみが發動して、早くより異性に接觸するが如き一種の早熟がある、此の如きものは主として變質者に認められる處であるが、しかし、またその環境のために早くより色氣づくやうな者も尠くない。即ち花柳狹斜の社會に生れ、或は放縱淫蕩なる家庭に育つた者の如きは、所謂朱に交れば赤くなるの類で、その置かれた境遇のために性慾の發動するところが早いのである。タルノフスカヤーが露國に於て百五十人の賣笑婦に就き、その初めて異性に接した年齢を調査した成績に依るに、

九 歳	一 人	十 歳	一 人
十二 歳	四 人	十三 歳	十二 人
十四 歳	十四 人	十五 歳	三十三 人
十六 歳	三十六 人		

の割合で、即ち百五十人の賣笑婦六十五人は既に十六歳以下の年齢で異性に接したのである。またバラン、デュシヤトローが巴里に於ける賣笑婦に就いて調査した結果に依れば、三千五百七十七人の賣笑婦中、十七歳以下の者は左記の如くである。

十歳以下	二 人	十一 歳	三 人
十二 歳	三 人	十三 歳	六 人
十四 歳	二十 人	十五 歳	五十一 人
十六 歳	百十一 人		

即ち十七歳以下の賣笑婦の数は五・六%の割合である。マルチノーは賣笑婦の多くは既に少女時代に破瓜することを説き、六百七人の中、四百八十九人は五歳乃至二十歳の間にて破瓜した

女子の性的早熟とその原因



云ひ、またグリムマルデーは十歳以前に既に破瓜した賣笑婦の多いことを認めたと云ひ、またグリムマルデーは十歳以前に既に破瓜した賣笑婦の多いことを認めたと云ひ、またその病的に亢進することも稀で變質性の女兒は常に性慾が早くより發現するのみならず、亦たその病的に亢進することも稀でない。エスキロールは四歳の幼女にして、男童と共に猥褻の行爲をなしたものを記述し、ロンブローニは殺人罪を犯した一婦人が、既に六歳の頃より猥褻行爲を演じ、八歳にして破瓜したことを記述し、また他の女性殺人犯人が小學生時代より、賣笑婦的行動をなしたことを記述した。

## 性慾と宗教

(一)

性的感情と宗教的情緒とはその根本に於て異なる處あるに拘はらず、その性質及び形式上に於て多くの共通性を有つてゐる。即ち性的感情も宗教的情緒も共に愛の對象を有し、之れに一身を捧げて熱烈の愛情を表することは兩者共に同一である。歐洲に於て男女兩性間に於ける愛情をば地上の愛 *Irdische Liebe* と云ひ、神に對する愛を天上の愛 *Himmelsche Liebe* と稱してゐる。此の如く兩種の愛には共通性があるから、一方の愛が他方の愛を誘起し、或は之れに變形するもの

あるのも決して偶然でない。クラフト、エビングも宗教的及び性的感情は、その興奮の度に於て相一致することを説き、兩者の相互ひに代償することを論じた。

元來世人は宗教を以て現世を超越した純形而上的のもの、やうに思惟し、また宗教家自身も斯く信じてゐるが、併し私共の見る所を以てすれば、宗教信仰の根柢には彼等宗教家の陋視する性的情緒が存在し、しかも之れが基調となつて宗教信仰の動機となり、或はその信仰の度を強めることが案外に多いものである。這般の事實に就いては、有名なる醫學者にして且つ人生界の事情を精知せるテオドル、ビルロートも説いた處で、千八百九十一年の頃、その僚友ハンスリックに與へた書簡の中にも、全然純粹にして肉慾から離れた宗教的感情の存在することを否定して次の如くに云つた。「私自身の感ずる處に依れば、特殊の宗教的感情があることを云ふが如き説は全く無意味である。世人の稱して特殊の宗教的感情と云ふ處のものは、畢竟想像的妄想的の氣分に外ならない。それは宗教の感奮者に於て色情の興奮を來すことや、彼の回々教徒に於ける祈禱運動や被鞭體宗徒に於ける飛びまわり等の如きものを見て判る。寺院が尼僧に對して花聲、僧侶に對して花嫁と稱せられてゐるのもまた前記の事實を示證するものである……人間は自身の眞像に摸



してその神を作り、之れに祈り、之れを讚美する。しかし、所謂神なるものはたゞ人間の有する性質の抽象されたもの、或は擬人化されたものであるから、人間も、神も、世界も、宗教もまた異つた處はない。蓋し人間は超自然的に何者をも考へるこゝ能はず、また何等非自然的のものを爲すこゝも出来ない。何となれば人間はたゞ人間的の性質のみを以て考へ、且つ行動するを得るに過ぎないからである」云。

實に此の言の通りで、超世的なる神も、その實は人間がその形體性質を尺度とし標準として、想像的に作つた擬人的所産物であるから、之れを自己の愛の對象として、實際の人間に對するが如くに熱烈の愛を傾倒するのは、恰も現實の地上に生存する男女兩性が、相互ひに愛着して一身を犠牲に供するのこゝ、その性質に於て根本に異つた處は無い。されば、宗教的及び性的情緒が相互ひに移行轉化し、或は聯想的に相結合して、容易にその一方を代償するこゝの出来るのも、思へば異にするに足らない。

性的本能の慾望が他の方面の事項目的に振り向けられて、それに新しい興味を有するやうになつた無意識的の轉向變形をば、フロイドは「昇華」Sublimierung と稱したが、宗教の信仰にもま

た性慾の昇華と認むべきものが尠くないのである。之れを古今東西の事實に徴するも、青春の身にして塵世を見限り、身を寺院に投じて僧となり尼となる者や、或は此の如き世捨人にならずとも、破鏡の嘆の悲しさに、若しくは愛人の無情に失望するの餘り、世を厭離して肉から靈に入るが如き者も世上その例に乏しくないが、併し彼等は果して徹底的に性慾から解脱した純潔の僧尼或は教徒と看做するこゝが出来らうか。否、私共の見るところでは、彼等は地上の愛を失つた代りに、天上の愛を欣求してゐるのである。生有の性的本能を宗教信仰の方面に轉向せしめて、間接にその本能を満足せしめてゐるのである。現實に於ける愛人を失つた代償として、擬人的なるゴット、基督、佛陀等に愛着し、燃ゆるが如き情熱を之れに捧呈してゐるのである。熱烈なる僧尼の神、佛陀等に對する態度と、戀に燃ゆる俗人の情人に對する態度との相類似するこゝは、實際上争はれない事實である。

## (二)

宗教的感情の強くして性慾の微弱なものは、その本能を全く宗教信仰の方面に轉化昇華せしめるこゝは決して困難でなく、その性感は天上の愛によつて補償せられ、敬虔の生活を送るこゝが



出来るが、之れに反して性慾の強く若しくは宗教的感情の發育弱きものは、その性慾を昇華する  
 ことは甚だ不完全であり、或は不可能であつて、肉慾感と宗教感とは相互ひに移行し、こても純  
 潔敬虔なる宗教的生活に到達し得られない。フリードリッヒは這般の實例を多く擧げたが、その  
 中には次のやうな尼僧があつた。それはゲヌアの聖カタリナといふ尼僧で、その宗教心は旺盛で  
 あり、その身持ちも嚴肅であるに拘はらず、胸裡には絶えず情火の燃わてゐるがため、彼女は之  
 れを冷却せんとして故意に地上に横り、*Liebe! Liebe! ich kann nicht mehr* と叫んだ。そしてそ  
 の際には教父に特別の愛着を感じるのが常であつた。或日、彼女は自身の手紙を鼻に觸れた處が  
 身に染み渡る許りの一種の匂ひを感じた。彼女はそれを『天國の匂ひ』だと言へて、之れを吸ふ  
 と死ぬやうな心地がすると言つた。

聖者に關する傳説に徴するに、その中には宗教的感情と肉慾的感情との結合したものが稀でな  
 い。殊に全く地上の愛を見棄てた尼僧に於ては、その愛人として基督に熱烈の愛情を抱き、しか  
 も、その由を公言して憚らぬ者さへある。コーセーガルテンは聖ニアグネスに關する傳説の中に  
 次の如き説話を記述した。彼女は美少年ルチウス、チーツスなる者に戀せられて、その胸の思ひ

を打明かされた時、直ちに之れを拒絶して、美少年から送つた贈物の上に、天國にある愛人基督  
 の壯美を詠じた詩を書して送り返した。しかも、その詩は肉慾感を基調とした情熱に漲つたもの  
 であつた。

熱烈敬虔なる基督教の信徒として世に知られてゐるツインツェンドルフ(十七世紀時代の人)の  
 生活は、性的本能の衝動及び感情が、全く宗教の方面に轉向された顯著の實例である。彼は少年  
 時代から基督に對して燃ゆるが如き同性愛情を抱き、基督を以て自己の精神上の新郎といひ、ま  
 たザヂスムスの傾向もあつて、基督の創傷を腦中に考へることによつて最高の快感をおぼれた。  
 彼の行つた宗教的儀式、即ち同胞間の接吻、寢ず番、愛の馳走等は、いづれも基督をば彼の性的  
 生活の對象とする情熱的要求から起つたものである。彼は異性に對する性本能を全然同性の基督  
 にのみ振り向けたのである。これと揆を同じうせるものには、女性としてゴットフリード、ケル  
 ケル創作『ドロテアの花籠』*Dorotheas Blumenkörbchen* に描かれたドロテアである。此の女は一  
 時テオフィルスといふ男を愛してゐたが、しかしその戀の到底成就せざることを思つた時、その  
 燃ゆるが如き愛をば基督に轉じて、その失つた戀を補充し、之れによつて大なる慰藉を得た。テ



オファイルスが再び彼女に近づいた時には、彼女は最早や此の男に對して露微塵の愛情をも有せずだ。天にある新郎の基督が、如何に不死の美しさを以て彼女の來るのを待ちつゝあるか、いかに彼女に無窮の生命を與ふべく用意してゐるかを語るのみであつた。

## (三)

禁慾生活をなせる聖者善智識に於ても、その抑壓せる性慾は時として何等かの形の下に表現するこゝがある。その實例として先づ第一に擧ぐべきものは、播磨書寫山の性空上人は嘗て生身の普賢菩薩の姿を拜せんを欲し、七日間祈願をこめたが、満願の曉に至つて、その夢に「室の遊女の長者を拜め、これぞ實の普賢菩薩なるぞ」この天啓を得、直ちに室の遊廓に至つて「端嚴柔和の生身の普賢、白象に乗れる」遊女の長者に接し、隨喜の涙を流さんばかりに喜んだと云ふ説話が『撰集抄』に記されてある。また親鸞上人が肉食妻帯をなす前に當つて「吾れ玉女の身となりて犯されん」この佛告を得たこと云ふこゝは「御傳抄」に記する處で、即ち六角堂の救世菩薩が、顔容端嚴なる聖僧の形を示し、廣大なる白蓮華の上に端坐し、親鸞に告命して宜く「行者宿報説女犯、我成玉女身被犯、一生之間能莊嚴、臨終引導生極樂」ことあつて、觀音菩薩が玉女となり、

上人に犯されんこの夢の御告げであつた。此の傳説を以て果して一の事實であるにせよ、上人の抑壓した或は潜在した性慾の宗教的表現を認むべきものである。

歐洲に於ても這般の實例が少く無い。過去世紀間に尼院に流行した「ヒステリー」に於て、性的幻覺が主要なる關係を有したこゝは明白な事實であつた。尼僧の抑壓した性慾は、「淫魔」Incubusの幻覺を惹起し、惡魔が男性の形となつて現はれ、自己を冒瀆するこゝを幻感した、ヒンクレルは或る尼が淫魔に苦しめられ、遂に牧師の助けによつてその危害を免れたといふ一例を記述したこゝがある。また女性の形態となつて現はれる淫魔の幻覺も、同じく聖者に幻覺されたこゝがある。聖ベネデクトはその誘惑に打克たんがために、裸體のまま、薔薇園の荆棘中に身を投じた。十七世紀時代の聖ニアンドレスもまた性的幻覺に悩んだ一人である。彼女は勉めてその性的本能の衝動を抑壓して純潔なる生活を續けたが、併し夜間に至れば幻覺幻聽を來し、誰か一人の男の忍び來るのを見たり、或は床の傍にその息を聞きその聲を聞いたりした。時にはその幻に見ゆる男が彼女の被つた床の蒲團を引きめくるこゝを感じた。彼女は終夜それに抵抗し、時には恐怖のあまり床から飛び出すこゝさへあつた。一夜その男は彼女の傍に來つて、自分の意に従は



ねばお前は世界で最も不幸なる女になるぞ云つて彼女を挑んだ。しかし、彼女は自分の身體は神に捧げてあるといつて、極力それに抵抗したこともあつた。また、或夜なきは一種の恐怖に打たれて、終夜戸外の雪の上に立つて一夜を明かすやうなこともあつた。しかし彼女も遂に基督の情交を想像することによつて、始めてその汚れた思想から免れ、純潔なる生活を維持することが出来たといふ。聖尼テレーゼもまた屢々性交を象徴した不思議の幻覺を有つてゐた。彼女は一日容色端麗なる天使が黄金作りの長鎗を携へ、之れを以て彼女の胸を突き刺したり引き抜いたりして、苦痛と共に最上の快樂を與へることを感じた。聖フランチャカもまた天使の肉的に交ることを幻覺した。

僧尼が三昧即ち恍惚状態（エクスタゼ Ekstase）に陥る場合に屢々性的感情が起り、その極度に於て神或は基督の情交を幻覺することは實際上掩ふべからざる處で、宗教的「エクスタゼ」の性的「エクスタゼ」はその間に密接の關係がある。所謂「法悦」なるものが如何にその感覺に於て性的快樂のそれに類同するかは、嘗て沼波瓊音氏が「俳味」誌上に掲載された「法悦」の記事に徴しても明かである。その一節に「マックス、ノルダウは三昧に入れる者は性交の際に

起るに同じ快味をおぼへ、また肉體に同じ現象を起す由を記せり。（中略）余の知る僧某、語つて曰く、我は法悦を経験せり。肉悦も身體せり。我は法悦を肉悦より前に経験せり。さて後に始めて肉悦を経験するに及び、その感、その現象（體に起る）の全く法悦に同じきに驚き、慄然たりきたゞその差も云ふべきは、法悦の方、肉悦の方よりも時間遙かに長きことなり。法悦は誠に大悦喜なり。大歡喜なり。而してその心持は正しく愛なり」とある。思ふに禁慾生活をなせる僧尼の中には、所謂法悦に入つて肉慾の代償を得て居る者も多からう。

性的感情と宗教的情熱とが、情の最も發動興奮し易き徑路に於て、共通性を有つてゐることは既に前述べた通りで、一方の情の燃ゆる時には、また一方に於ても炎々として燃ゆる。熱烈に敬虔に神に奉仕してゐる時、遺精する僧侶のあることや、禮拜中情熱に苦しむ婦人のあることはエリスの擧げた處である。されば宗教心は必ずしも性的本能を制克するものに非ずして、却つて之れを昂めるやうな機會が多い。基督に對する愛が恰も異性間に於ける愛の如きものであることは、之れを聖者の自傳等に徴しても明かであり、また彼の殉教者が慘酷なる迫害に堪へ忍び得られるのも、その根柢に於て性的快樂の伴ふに因ることの多いのは、私共の推測するに難からぬ處



である。

## 愛慾の藥

(一)

「愛慾の藥」、一に催情藥 (アフロヂシアクム Aphrodisiacum) を稱せらるゝものは、性慾を刺戟發揚する作用のある藥劑の謂ひで、彼の避妊劑墮胎藥は別物である。私は古來より汎く世に行はれたこの種の藥劑に就て少し許り記述したい。

永遠に生の快樂を味はんことを求めるものは、不老不死の藥を求め、性の歡喜に酔はんことを愛慾の藥を求める。不老不死の藥は未だ發見さるゝに至らないが、愛慾の藥に至つては古代より汎く用ひられて効驗を奏する者も尠く無い。それには内用するものと、外用するものとの二種がある。しかし、内用する愛慾の多くは、いづれも危険なる劇藥毒素であつて、それが性慾を刺戟發揚するのは、その中毒作用の一として、神經中樞を興奮し、次で麻痺せしむるに因り、或は性機關の刺戟充血を喚起するに因るのである。恰も墮胎藥として使用せらるゝ藥劑が大抵劇毒藥であ

りその中毒作用の一として子宮筋の攣縮を惹起するものと同様である。單に墮胎作用のみを有する藥劑、即ち狹義に於ての墮胎藥なる者の無きが如く、また性慾のみを刺戟興奮せしめる單純の藥もなし。いづれも全身中毒の症狀の一として、墮胎或は催情の惹起せられるのである。また外用せらるゝ愛慾は局所刺戟劑であるから、その濫用は性機關の炎症性疾患を誘發し、却て性交不能に陥らしむるに至るが如き惡結果を招く危険がある。古來戀の戯れや、愛の増進の目的から此種の藥劑を妄用して貴重な生命を犠牲に供した痴人も尠く無い。一時の官能的享樂のために劇毒藥を内服し強烈なる刺戟劑を外用して健康を損し身心を害する者の古今東西を通じて絶われないの如く、愛慾のためにはその前に生命を捧けても悔ひず、性の歡樂を求追して醉生夢死する者の如何に多數なるかを偲ばせる。

愛慾の藥には自己の性慾を刺戟發揚せしめるものと、他の異性をして自己に思慕の情を喚起せしめる者がある。後者所謂「惚れ藥」或は「媚藥」を稱せらるゝもので、これにも内用と外用との二種があるが、しかし、その中には迷信或は空想より出た見戲的な者も尠く無い。古來我國の俗間に行れた守宮(イモリ)の黒燒の如きは、その好例の一である。それを人に向つて密かに内



用せしめ、或はその粉末を振りかけるに、愛慾を惹起せしめて、思ひが遂げられるに信ぜられて居るのは、一種の迷信的傳説より起つたことで、守宮の雌雄をば一の竹筒の節を隔て、別に入れて置いたが、いつしかその節を喰ひ破つて接合するに、或は雌雄を別々に離して身體を焼いても、その煙は自然に相合するに云ふやうな俗説に由来するのである。守宮の黒燒は今もなほ御成街道の黒燒屋に賣つてゐるが、黒燒にした雌雄をば土器に容れ、それを更に桐の小箱に納めて、さも勿體らしく繕つてある。南洋のセレベス島に行はる、惚藥に至ては、守宮の黒燒よりも更に兒戲的なタワイも無いもので、古く二個の木片に呪文を書いた一枚を添へ、それを帶で肌につけ相手のことを思ひさへすれば、戀の目的が達せられるに信ぜられ、また印度の或地方では虎の鬚を所持してゐるに、思ふ人戀を遂げるに云つて、青春の男女は血眼になつて虎の鬚を探しまわるに云ふ。此等は固より俗間の迷信より起つたものであるが、歐洲に於ても古代の羅馬にては牝馬の胎盤より製造したらしいものを戀の秘藥に信じて、之れを「ヒッポマネ」Hippomane と稱し「今日でも佛國にては或る動物の胎盤を乾燥して粉末にしたものを丸劑とし、それを相手の者に内服せしめるに愛情を起すに云つて、蕩兒淫婦間に賞用せられてゐる。

る。これも同じく一種の空想より起つた迷信であつて、野獸が分娩の際胎盤を食するに、その仔に對する愛情が起つてくるが、もしそれを食はないやうにするに、愛情が起らずして仔を噛み殺したり、喰つたりするから、胎盤には愛情を惹起する特殊の成分が含まれて居るに相違ないに云ふ迷妄的觀察に基いた俗信から、戀藥の材料に胎盤を用ひ、之れを秘藥とするに云つたのである。

なほ迷信に基つける戀の秘藥には夙には支那に行はる、人參に、古代の歐洲に賞用された「サチリオン」Satyrion 等がある。人參には不老長壽の靈効あるの他にも性慾を興奮して戀を遂げ得られる効驗のあるやうに思はれてゐるのは、一面に於ては人參が多少神經系を刺戟興奮する作用のあるがためであらうが、併し他の一面には人參の根が人間の形に類似してゐるがため起つた迷信に出發せるものである。支那にては人參に關する奇怪荒唐の不可思議的傳説が多く、例之は「抱朴子」には「人參千歲化爲小兒」といひ「五雜俎」には「千歲人參、根作人形、千年枸杞、根作狗形、中夜時出游戯、烹而食之、能成地仙」といひ「廣五行志」には「隋文帝時、上黨有人、宅後、毎夜、聞人呼聲、求之不得、去宅一里許、見人參枝葉異常、掘之入地五尺、得人參一如人



體、四肢畢備、呼聲遂絶」にあり。此の如く人參を以て人間の如くに言語を發し、また千歳を経れば小兒に化するといふが如き神秘的性質あるもの、様に信じ、また人參を奇瑞視して、「禮斗威儀」に記せるが如く人參のある處には上方に紫氣があるとか、或は搖光星散じて人參なるか云ふやうな迷信もあつて、人參をば神祕的不可思議な生物と看做したため、従つて萬病に靈効のある神劑として珍重し、また人をして不老長壽たらしめ、活氣を盛んにし性慾を發揚し、愛情を挑發する卓効のあるものとして之れを賞用するに至つたのであらう。「人參根有手足面目、如人者爲神」に『本草綱目』にあるが如く、人參の形が人間の形に類似してゐるので、神祕的觀念を起さしめたことは明白であつて、人の形に善く似てゐるもの程貴重視せられ、その價も甚だ高い。

歐洲の古代に賞用された戀の秘藥「サチリオン」は一種の蘭科植物より製したものであるが、それが催情の作用のあるやうに信ぜられてゐたのは、此の植物の球莖が罌丸の形に酷似せるがため、何も特殊の効用成分を含有せるに因るのでは無い。また動物の血液や心臟を戀の藥と信じ之れを思ふ人に食べさせること、戀が成就すること云ふ迷信もある。現に今日でも北獨逸の地方には

蝙蝠の血、燕の心臟が神祕貴重なる愛の藥として賞用せられてゐる。

(二)

以上は、單に迷信から起つた愛慾の藥の一斑に就て記述したものであるが、是より以下には、科學上より見て、催情作用を發揮することの確かなる民間藥の種類を擧げてみよう。しかし、此種の藥劑の中、内用せらるゝ者の多數は、神經毒 Nervenmittel であつて、腦髓を一時興奮せしめ、次で麻痺せしめるがために性慾を發揚せしめる者もあれば、或は特に腰髓の性中樞を刺戟してその反射機能を亢進せしめ、また血管運動神經に作用して血管を擴張し、性機關の緊張及び充血を喚起するがために性慾を興奮せしめるものもある、また此等の神經毒以外には、直接に泌尿生殖機關の刺戟及び充血を惹起するによつて催情せしめる刺戟劑もある。

神經毒の中、古來の愛慾の藥の主要成分に調合されたものは、印度大麻、阿片、蔓陀羅華、菲沃斯等の如き麻酔藥である。希臘太古の詩聖ホーマーの好んで飲用したと云ふ「ネベンテス」Nepentes は今の世にもその名を傳へてゐる愛藥であるが、その主成分は阿片であること云ひ或は印度大麻だとも云はれてゐる。阿片の有効成分中、その主要なるものは「モルヒネ」で、人の知



### 愛慾の藥

るが如く神経系を麻痺する作用がある。その適量を内服するに、精神は朦朧として恍惚状態となり、一種の愉快の情念が起つてくるから、催情作用も之れに伴ひ、また一面には感覺を鈍麻するにより性的快感の持続時間を延長する。印度に於ては古來阿片を愛藥に供し、またカラスの説に依るに、ボンベイに於ける賣笑婦は飲酒しない者でも阿片の煙を好む者が多いと云ふことである。支那人が阿片煙を嗜むのも、性的享樂の目的に出づることが多く、支那の青樓には特に阿片喫煙具の備へ付けをなす者もある。

印度大麻の原産地は印度及び波斯であつて、夙に古代より麻酔作用のあることが知られてゐた。支那の三國時代に於ける外科の名醫華佗の用ひた麻酔劑「麻沸散」は印度大麻を主劑とせるものである。今日でも亞細亞、亞弗利加地方に於て、快樂の増進、性慾の刺戟劑として内用する「ハシツシユ、クルスチエルス」及び「モラク」等の如き麻酔剤はどれも印度大麻の果實や、菜花等より製造したもので、その少量を内用するに、麻酔作用によつて嚮を忘れ、愉快を感じ性慾が發してくるが、もし過量に用ひるに精神が昏亡錯亂し、また痙攣症狀等を惹起して死に導く毒性がある。

さりながら愛慾の藥として古代に最も流行したものは「アトロピン」といへる麻酔作用の顯著なる化學的物質を有する曼陀羅華（我國にては朝鮮朝顔といふ異名がある）である。此の植物の根は、人參と同様に人間の形に類似してゐるので、神祕なる魔力があるやうに迷信した古人は之れを賞用して享樂に浸つた。聖約全書の創世記第三十章に見ゆる赤茄（ヅダイム *Dudaim*）は蓋し此の曼陀羅華で、ヤコブの妻レアは之れを用ひて再び夫の愛を回復したのである。曼陀羅華の麻酔作用のあることは夙に支那人にも知られ、「本草綱目」にも「少頃、昏昏如醉、割瘡灸火、宜先服之、則不覺苦」とあり、創傷を切開し灸火を點する時には之れを内服させて知覺を麻酔せしめた。江戸時代の文化の頃、有名なる紀州外科醫華岡青洲の用ひた麻酔藥「通仙散」は實に曼陀羅華を主藥とせるものであつた。そしてこの植物は、麻酔作用の強い「アトロピン」及び「ヒオスチアミン」を含有し、一に狂茄子と云ふ俗稱もあるが如く、その過量を内用するに、精神が錯亂昏亡して發狂様の状態となるが、その少量は、酒精飲料や阿片等のやうに、精神を爽快ならしめ愉悅歡喜の情を惹起せしめるので、戀の秘藥として汎く賞用せられ、殊に中世紀時代には獨逸に於て可なり長い間流行したことがある。曼陀羅華の成分たる「アトロピン」は麻酔作用のあ

### 愛慾の藥



る他に、血管を擴張する作用もあり、また陰莖海綿體支柱の筋肉を弛緩せしめる作用もあるから性機關の充血勃起を催進する。これまた戀の藥として曼陀羅華の實用せられた所以であらう。

今日に於ても佛國には、痴漢蕩兒の出入する阿片・エーテル或はハシツユ店舗がある。この事實に就いては、シウエブレー及びドストック等の興味ある報告があるが、此等の店舗を訪ふものは男子もあれば女子もあり、いづれも麻醉藥に酔ふて刹那の快を貪ほり性的興奮を求めるのである。

以上記述したのは、麻醉藥であるが、なほ是れ以外に、性機關を刺戟して充血を喚起するがために催春藥として古來實用さる、「カンタリヂン」がある。此の藥劑は俗に豆班猫云ふ昆蟲より製造したもので、之を外用すれば強く皮膚を刺戟して炎症を惹起し、之を内用すれば泌尿生殖機關の充血を催進するので、古來戀の藥として汎く用ひられた。しかし、副作用として膀胱炎、腎臓炎を發生せしめる危険があつて、そのために生命を失つた蕩兒も尠くない。谷崎潤一郎氏の近作「神と人との間」にも、放蕩なる一文士が菴菴を内用し、それがために劇しい腎臓炎に罹つて死亡するこゝが巧みに描かれてある。

近代に至つて愛慾の藥として現はれたものに、「ヨヒンビン」があり、「ムイラチ、ン」がある。此等の藥劑は、直接に脊髄の勃起中樞を刺戟し、また血管を擴張せしむる作用があるがために特効的催春劑として實用せられる。「ヨヒンビン」はアフリカ西部に産する「ヨヒンペーヘー」Yohimbeheの皮質から製造した植物性鹽基であつて、醫療上には陰萎症に使用されて居るが、しかし、果して確實に効果を奏するか否かに就ては未だ明白でない。モルの如きはその効力を否定し、之れによつて勃起機能の起るこゝのあるのは全く一種の暗示作用に起因するものゝ看做してゐる。されど此の如き見解は固より極端に失するもので、動物試験上、「ヨヒンビン」が骨盤内の臓器及び脊髄下部に於ける血管を充血せしめ、勃起中樞の反射的刺戟を昂めるこゝは疑ひなき處であるが、しかし、人間に於ては多少の効を奏するのみで、卓効あるものゝ思はれない。また「ムイラチ、ン」は南米ブラジルに産する植物「ムイラプアマ」Muirapumaより採取した一種の植物性類鹽基「ムイラプアミン」を含有有機物なる「オボレチ、ン」を配合した製劑であるが實驗上左程の効果も無いので、今日は之れを使用する者も尠い。

上述の藥の他に、生殖腺たる睾丸、卵巢より製作した藥劑の種類も可なり多い。此等は、いつ



れも性ホルモンの作用によつて性慾を刺戟發揚せしめる目的の下に作られた者であるが、しかし未だ効驗の著明なるもの見當らぬ。

是を要するに古來より世に行はるゝ愛慾の藥には劇藥毒藥の部類に屬する麻醉藥、刺戟劑もあり、また直接に勃起中樞の反射的刺戟を亢進する者もあるが、しかし、いづれも危険なる副作用を有することを銘記しなければならない。罌丸、卵巢の製劑は身體に有害でないにしても、實際上眞に効果あるや否やは、なほ疑はしい。それから、古來外用劑として用ひられたものには、サフラン、生薑、肉桂、沒藥、麝香の如き局所刺戟劑もあるが、しかし、その濫用は女性の性機關の急性及び慢性炎症を惹起する虞があり、そのため愛人の健康を害し却て愛を失ふが如き反對の結果を招いた實例も多い。

## 浴場と性的風俗の紊亂

(一)

北攝に聳ゆる武庫山の東麓の一角に位する寶塚の地は有名なる温泉地で、その浴室は舊温泉

新温泉との二ヶ所に分れてゐる。前者は同地に湧出する礦泉、後者は普通の淡水に入浴せしめる温泉場であつて、男女の浴槽を區別する共同浴場の他に、「家族温泉」、「特別湯」と云つて、男女の混浴する浴室が兩所共に數室ばかりある。しかし、家族關係の者が之れに入浴することは概して稀で、その多くは浴を共にして、官能的享樂を擅にせんとする男女である。官憲が今に至るもなほ之れを黙認してゐるのは、私共の夙に怪疑に堪へざる處であるが、兎に角、寶塚の温泉場には、このやうな特別の浴室があるがために、阪神及びその他の諸方面より、狎妓情夫を擁して同地に來遊する男女も尠くないのである。

しかし、浴場に性的風俗の紊亂を伴ふことは、必ずしも今日の寶塚に限つたことでは無く、古代に於ては、東西を通じて浴場が淫蕩なる男女の會合所となり、或は賣笑行爲の演ぜられる魔窟たりし時代があつた。私は這般の事實に就いて敢て叙説を試みたいと思ふ。

抑々歐洲に於て沐浴の慣習が盛んに行はれ、規模の廣大なる公開浴場を始め、各民家にも浴室の備へがあつて、空前絶後といつてもよい程に入浴の風がその絶頂に達したのは、實に羅馬の帝政時代であつた。西曆七十九年、即ち我國の景行天皇の時代に、地震と火事と噴火とで三十六時



間のうちに破壊倒潰して、數丈の地下に埋没してしまつた伊太利の遊覽地ボンベイ市が、百餘年前秩序的に發掘されたところは人の知悉する處であるが、その遺蹟を見るに、先づ驚かされるのは浴場の規模が大であつて、しかもその完備してゐることである。冷水浴場、温水浴場、蒸氣浴場の三つが揃ひ、蒸湯の方では、身體に膏油を塗擦してマッサージ（按摩）をやつた。今まで發掘された公開浴場は三ヶ處もあり、また三個所の私設浴場も發見され、その他發掘された十二軒の家屋には、いづれも完備した浴場が施設されてある。そして、このボンベイ市より二哩隔つた片田舎のボスコレアリーの小さな家々でも、設備の完き浴室を見ないことは無い。ボンベイ市は水の供給が甚だ良く、南方に聳ゆるヴェズツ山から水を引いたので、細民でない限り、すべての家には水管の設けがあつた程、澤山に水が供給せられたがため、従つて浴場、浴室が公私共に多く建設せられ、入浴の風が盛んに行はれたのである。處で、このボンベイ市はヴェズツ山麓の遊覽地で、その遺蹟廢墟を見るに、家屋の壁畫、彫刻、看板、裝飾等一として淫蕩の風を帯びざるは無く、如何に當時の羅馬の風俗が甚だしく頹廢してゐたかを偲ばせる。ルバナレ小路 *Vico del Lupanare* 通りの奥の方には青樓の客引所らしい家があつて、その石門の上には男根の看板を掲げ

てあり、それから二三軒先にあるルバナレの家の二階には澤山な小室があつて、その壁畫はいづれも淫蕩であるが、その中にも人獸、人鳥相姦の醜怪極まる壁畫さへある。なほこの小路を前に進んで行くに、ボンベイ市第一等の家で、その規模の廣大なものと輪換の美をつくしてゐるがために、特に人目を惹く處のヴェツチの家 *Domus Vetricum* といふのがある。その正門には男根を描いた壁畫を掲げ、主人の部屋の壁には種々なる淫蕩が描かれてあつて、當時の羅馬人が如何にいろ／＼の方法によつて肉的享樂を恣にし、その飽くなき慾情を刺戟し、満足したかを想はせる程、淫猥の限りを極めてゐる。されば、入浴の風が盛んであつたと共に、之れに伴うて男女の混浴もまた盛んに行はれて、猥褻行爲に耽つたことは、容易に推察することが出来る。

然るに肉を卑しむ、靈を尊ぶ處の基督教が羅馬に入つて、人心を支配するやうになつてからは『身體及びその皮膚を清潔にする』ことは靈の不純を意味する』 *Die Reinheit des Körpers und seiner Hülle bedeutet Unreinheit der Seele* 『人は恰も甲冑の中に在るが如く、不潔のうちに生活すべきもので、それによつて靈を完全確實に保つことが出来る』 *Der Mensch soll im Schmutze wie in einem Harnisch leben, sodass die Seele sich darin sicherer aufhalten kann* といふやうな所説が勢力を得る



に至つた結果、聖者は勿論、一般の信徒は身體を不潔にすることを以て、靈を清くする所以であるに信じ、沐浴を惡み斥けたので、さしも帝政時代に隆盛を極めた入浴の風も遂に衰滅してしまつた。

此の如き肉卑靈尊の宗教的思想に信仰は、中世紀時代を通じて普ねく世に行はれたが、併し基督教の敬虔なる信者が東亞にある聖地パレスチナに巡禮し、また十字軍が起つて、東亞の方面に幾多の軍隊が派遣されてから、東洋に於ける風俗に接觸した彼等によつて、歐洲に持ち來されたもの、一つは實に入浴の風であつた。それは回教徒の風俗であつて、土耳其に於ては日に七回も入浴するといふ大浴場もあつた。さりながら茲に一言したいことは、回教の開祖モハメットの沐浴に對する思想である。彼もまた肉を卑しむ思想から、最初は男女共に公開浴場に入ることを禁じたが、その後、男子には腰巻きをつけて入浴すべきこと、女子には家て入浴することの出来ない場合に於てのみ入浴を許した。しかし、彼が沐浴を惡み斥けてゐたことは、「地の全體は祈りの場所として私に與へられた。墓場は浴場を除く外すれば、地は純潔である」Die ganze Erde ist mir als ein Ort des Gebetes gegeben und ist rein, den Begräbnisplatz und das Badehaus ausgenommen

と云つた言に徴しても明かである。されば、回教徒に於ける沐浴の風は決してモハメッドより起つたのでは無く、その後教儀的の洗滌や衛生的の關係や享樂等によつて、あらゆる階級間に行はれるに至つたので、西洋歴史上より見れば、水に關する文化と身體の清潔とは、羅馬帝國に回教國に發祥したもので、今日に於ても「土耳其風呂」の名は、その規模の完整せること、古い歴史を持つてゐることのために、世界に汎く知られてゐる。

十二世紀以來、沐浴の風が更に東亞より歐洲に輸入されたので、既に十三世紀には佛國の巴黎には浴場が設けられて、入浴の風が稍常習のやうになり、獨逸に於てもまた行はれて、その始めは男女が混浴しても秩序正しく、且つ禮儀をも失はなかつたが、しかし永くは續かず、いつしか性的風俗の紊亂を誘致するやうになつたのである。

## (二)

千二百九十二年頃には巴黎に公開浴場が二十六箇所も出來、その傭人は毎朝市街を通過し、湯の沸いたことを聲高に呼ばはつて市民に知らせた。浴場には蒸氣浴もあれば温湯浴もあつた。娼婦、癩病患者及び浮浪人には入浴を許さない規定であり、また日曜日祭日には浴場を閉鎖し



た。然るに十四世紀近くに至つて、浴場には享樂、耽溺、賣笑の風が伴ふやうになり、デユフルが説いた如く、巴里の浴場は羅馬帝政時代の浴場のやうに醜化した。天主教の僧侶が之れに對して責罰を加ふべきことを聲明したにも拘はらず、老幼貧富の別なく、あらゆる民衆は争うて浴場に赴き、官能的享樂を恣にした。されば、當時信仰深いものは「浴場を訪ふ女は、清潔なる肉體をもつて、しかし、靈の清さを失つて、浴場より家に歸るであらう」Ein Weib, das die Bader besucht, käme mit reinem Leibe, aber auf Kosten ihrer Seelenreinheit von dort nach Hause 云々で痛嘆した程であつた。

獨逸に於ても最初は浴場の風紀が外觀上善く保たれてゐた。最小の都市にもあらゆる階級を容れる浴場の設備があつて、湯の沸いた知らせがあるに、多くの民衆は急いで浴場に馳せ、貧民の如きは既に眞つ裸になつて急ぎ往いた程であつた。浴場は殆んど共同浴で、いづれも全く裸體で這入つた。湯女 Badfrauen がゐて、浴客を按摩し、また脱衣室も男女共通であつたから、自然的風紀が紊亂せざるを得なくなつた。中世紀時代に出た獨逸の文書や繪畫に徴するに、男女兩性がいづれも殆んど或は全く裸體で混浴して、狎戯せる有様が露骨に描寫されてある。ハンス・

ボックの妙筆に成つた野外の礦泉浴場、ハンス・ベハムが巧みに描いた宏大なる礦泉浴場、コルネリウス・ホルスタインが描寫した浴場等の光景は實に猥褻を極めたもので、彼方にも此方にも裸體の男女が相抱擁して戯れてゐる。

千三百九十七年に瞑目したランゲンスタインが、ウィースバーデンに於ける浴場の光景に就いて記述した處を讀んでも、男女が裸體のまま、相抱いて狂踊狎戯した光景が、如何に猥褻醜陋であつたかを描寫してあるが、浴場の風紀が斯くまで甚だしく頹廢したために、純潔であつた處女も娼婦として、貞淑であつた夫人も姦婦として、浴場より家に歸るが如き態たらくになつた。浴場に於て演ぜられたあらゆる肉慾的享樂の果ては失望と悔恨があるのみで、洗はれた肉體は白く清くなつても、その精神は汚れ、その肉はヴェヌスの矢で傷つてゐた。ウイールヘルム・フィッセルがその著書『賣笑』の中に述べた如く、「中世紀に於ける浴場生活——男女が裸體で混浴した處の——は隠れたる賣笑に外ならぬもので、それ程風紀は頹廢してゐた」Das Badenleben im Mittelalter——die beiden Geschlechter badeten nackt zusammen——war nichts anderes als verstreckte Prostitution, d. h. es artete dahin aus のである。瑞西に於ても同様で、ボッキオの説に依るに、十六



浴場と性的風俗の紊亂

世紀の初め頃、バーデン市の浴場は男女が混浴して甚だしく猥雜を極め、また、一方には賣笑行爲が盛んに演ぜられる魔窟となつた等、性的風紀の頹廢は前記の佛、獨のそれにも劣らなかつた。バーデン市の浴場が十九世紀の初葉に至る迄もなほ自由なる交歓境であつたことは、セナクターの記述した處である。

英國に於ても、ライトの記する處に依れば、十三世紀の頃より温浴が流行して、あらゆる階級に好まれ、朝起きるに直ぐ入浴し、中食後、或は就褥前にも入浴するにいふ有様で、また旅行より歸つた客は入浴するのが殆んど常であつた。無論男女の混浴も行はれて、當時に於ける數多の戀愛物語を見るに、愛人同志が始めて媾曳する場所は共同浴場であつた。英國に於ける浴場の風紀が甚だしく糜爛して妓樓化するに至つたのは、實にヘンリー第二世の治世たる十六世紀時代であつて、「温かき家」の名の下に建てられた浴場は、倫敦市中に散在し、いづれも賣笑婦を抱へ置ける妓樓であつた。

佛國に於ては、「ユゲノッテン」の如き羅馬舊教徒の争亂前、あらゆる浴場は衰滅してしまつた。その結果は、フランクリンが「道德は勝利を占めたが、清潔は敗化した。」*Die Moral gewann,*

*aber die Sauberkeit verlor* といふやうに、浴場が無く、清潔の觀念も廢れたので、八日間も手を洗はなかつたやうな貴婦人さへあつた。そのため垢臭を消す必要から、種々の化粧品香料を濫用するが如き風が起つて來たが、しかし不潔な皮膚に寄生する虱を退治するに非常な困苦を感じ、十七世紀時代までは、それが殆んど不可能であつたが、その後、次第に寒浴、温浴の風が再び巴里に入り、他の歐洲諸國にも浴場が設立せられて、次第に近世式の設備に向ふやうになつた。

往昔の風紀の紊亂に伴つた浴場に加へられた法的禁止は、今日に於てはマッサージ・インSTITUTE Massage-Institute の上に向けられてゐる。マッサージがその機械的に皮膚を摩擦することによつて、性的に作用することは周知の事實である。倫敦及びその他の都市にはマッサージ・インSTITUTEがあつて、性慾を満足せんがために之を訪ふ婦人が尠くないことはエリスが記した處である。

(三)

これより轉じて日本に於ける如上の事實を叙説するに當り、我國に於ては夙に太古時代より沐浴の風が大に行はれたことに就き、豫じめ一言を費すの要あるを感じる。

浴場と性的風俗の紊亂



『古事記』に「伊邪那岐大神詔、吾者到於伊那志許米岐穢國而在邪理、故吾者爲御身之禊而到、坐筑紫日向之橋小門之阿波岐原而禊祓也」<sup>二</sup>とあつて、イザナギの命が黄泉平阪より遁れ、御身の不潔を洗濯し玉はんがために、筑紫日向の橋小門 阿波岐が原に至つて禊し玉うたさあるのが、古史に始めて見れた沐浴の事例である。しかし、これは神話であるから、その事實なるか否かを明かにすることは出来ないが、我國の禊(みそぎ)の式がこのやうな俗習に起因することは疑ひない處である。このみそぎなるものは、元來河海に全身を浴してその汚穢を洗滌するのから起つた式であつて、彼の熱帯地の民族が川或は海に入つて、全身を洗ふ風習も何等かの因縁關係があるらしく想はれる。無論、日本民族の全體が熱帯地方から來たもので無く、その幹部たる天孫民族即ち大和民族を稱せられる固有日本人は、東亞の大陸から朝鮮を經由して日本内地に移住した蒙古種族に相違ないが、しかし、先住民族の一として、九州全土及び本島の沿岸に汎く棲住した倭人(漢史の『魏志』及び『後漢書』に記載せる)は、南洋系の種族を認むべき者であるから、この種の熱帯民族の慣習が大和民族にも傳はり、もつて熱帯地に在つて河海に浴した風習までも波及したのであらうと思はれる。ここに我國の氣候は一般に溫暖であつて、南部の如きは暑中殆ん

熱帯氣候を選ぶ處もない程であるから、民族一般に沐浴を好むに至つたらしい。古來宗教的儀式の一として行はれたみそぎが、河原に於て營まれることになつてゐたのは、蓋し熱帯民族の河海に浴する習俗に淵源したものでらしく、かの『夫木集』の和歌に「うしほ汲むいつきのいもる年古りてや、朽ちにけりをの、江の橋」<sup>三</sup>とあるのを見ても、その起源を推知することが出来る。

加之、世界有数の火山國たる我國は殆ん悉く温泉が湧出し、古代より如何に温泉が豊富であつたかは、既に奈良朝時代の詩人山部赤人の作歌の中に「すめろぎの神のみ、このしきます國のこみん、湯はしも澤にあれども云々」<sup>四</sup>とあつて、我國には湯即ち温泉が澤山にあつたことを詠んでゐるのを見ても知られる。その中にも伊豫の湯も有馬の湯もは、『伊豫風土記』、『日本紀』等の記事に徴して明かなるが如く、天皇、皇族方が御幸したまうた史上有名の温泉であつて、療養のため或は遊興のために浴せられ、就中、有馬の地は京畿に最も近い温泉地であるがために、來遊する貴顯縉紳も多かつた。此の如く温泉に浴する習俗が夙に上古時代よりあつた上に、各人はその邸宅の一部に、温室、風呂を設けて入浴する風も夙に行はれた。一寸茲に述べて置きたいのは、風呂の語原が室(むろ)であることである。蒸風呂、即ち本來の風呂は室で、喜田貞吉博士



の説に依れば、信州伊那郡より諏訪郡なき雪の深い地方では、今も冬になると、土窟を作り屋根を葺いて土で被ひ、青年等はその内で藁細工なきの手工に従事する。これを室(むろ)といつて居る。關東地方では、所謂特殊部落に往々この遺風がある。若しその内で火を焚いて水を注ぎ、水蒸氣を作つたならば即ち蒸風呂になる。要するに風呂はむろの轉訛で、その本來は蒸氣浴である。然るに一方には、前述の如く風に温泉に浴する風があつて、自然湧出する山間の湯に浴してゐたのが、後にそれを湯槽に湛へて入浴に便し、遂には冷水を湯槽内に暖めて沐浴するこゝが工夫された。後世に至つて所謂湯屋といふのが即ちこれで、風呂屋といふのは元來蒸風呂のこゝである。されば湯屋は温水浴、風呂屋は蒸氣浴であつて、その間に差別のあつたのが、近代に至つて稱呼の區別がなくなり、湯屋が風呂屋とも呼ばれ、風呂屋が湯屋とも稱せられるやうになつた。さて我國に一定の共同浴場を設けて、衆人を浴せしめる風習が起つて來たのは、恐らくは平安朝時代の中期以後のこゝらしい。これより遙か以前の奈良朝時代に於て、光明皇后が慈善のため浴室を設けて、諸人を浴せしめたといふ史上の記事もあるが、しかし、これには疑を挾む史家も多いから、その眞否は明かでない。しかし共同浴場の起原が佛家の慈善的行爲に出たこゝは、

隨か事實らしく思はれる。『今昔物語』の中に、東山へ湯あみに三人を誘つたこゝを記してあるが、これは寺院にある湯をさしたものらしく、また『参考保元物語』に、寺院に湯室があつたこゝが記されてある。『松屋筆記』に「もこ、湯風呂を設けて諸人を浴せしむるは僧家に出でたるなり」とある通り、寺院に共同の浴場を設けたのは、公共的慈善の動機に出たこゝは明かである。されば別に浴料、湯錢を徴取しなかつたに違ひない。平安朝の末葉なる建久三年に、後白河法皇が御追福のためさあつて、共同浴場を設け諸民に浴せしめ玉うたこゝが「吾妻鑑」に記してあるが、その文に「於山内百ヶ日温室、往反詣人並土民等可浴由、被立札於路頭」云々あるからこれまた一時の施行として浴場を設けられたこゝが分る。

同じく平安朝時代の末期、建久二年に、仁西上人の再興した有馬温泉は、その地に十二の坊舎を設け、諸國より來集した浴客を宿泊せしめた共同浴場であつた。そして各坊舎毎に湯女各二人を置いて浴客の世話をさせた。これが即ち湯女の起原であつて、年の老いたものを大湯女、年の若いものを小湯女といひ、各その通り名を定めて代々之れを繼ぐこゝになつてゐた。そしてこの湯女は「有馬温泉誌」に記する處に依るに、「白衣紅袴の装束を着し、齒を染め、眉を描きて、恰



も上臈の如き姿をなし、専ら高位公卿の澡浴せらるる前後、休憩の折に當り、座に侍りて、或は碁を圍み或は琴を弾き、または和歌を詠じ、今様を誦ひなごして、徒然を慰むるを以て業とするなりければ、なみくの者にては爲し得べくもあらず。且つ土地の産土神の下に生れしものならでは、湯女なるこゝを得ざりしこゝなり」云あるから、高等賣笑婦と認むべきもので、恰も江戸時代に大名國守の相手となつた吉原の花魁が、錦織の美衣と綺麗な桂を襲ね、和歌、俳諧、碁、茶、琴等、種々の遊藝に通じてゐたのと同様、高位高官の公卿が浴坊に滞在する徒然を慰め、枕席に侍する相手とするがために、官女紛ひの湯女を置いたのである。しかし、後世に至つて多數の庶民も有馬の地に來浴するやうになつてからは、湯女の服装や品格も民衆的になつたのは當然の成行で、江戸時代に於ては、西澤季叟の「綺語文章」中にある「有馬温泉の記」に依るに、「鐵漿をつけ、前帯にして、朝は八つ時までを小湯女、その後は大湯女が浴場の時刻を客にしらせ、浴衣を持ちて案内し、衣類下駄を預り、番をして侍女の如くす」云ある。そして各坊舎に抱へてある小湯女の名は古今不變で、人は替れざる名は變らぬ通り名であつた。元祿版の「攝陽軍談」を見るに、各坊の名と小湯女の通り名とを掲げてあるが、嘉永版「綺語文章」中の「有馬温泉記」

に掲げてあるのもそれと全く同一である。

一の湯坊名、并に小湯女の名

奥の坊 (なつ)	伊勢屋 (たけ)	御所の坊 (まき)
尼崎坊 (ゆり)	福宜屋 (すぎ)	角の坊 (つた)
二階の坊 (くり)	大門 (たつ)	若狭屋 (いち)
中の坊 (つね)		

二の湯坊名、并に小湯女の名

池の坊 (まつ)	川崎 (や)	休所 (たけ)
河野屋 (みつ)	兵衛 (みや)	大黒屋 (たけ)
水船 (つじ)	下大坊 (しけ)	素麴屋 (ふじ)
茅の坊 (きい)		

此の如く各湯坊に抱へてある小湯女の通り名が世間に知られてゐるのを見るに、いづれも相當に美しい若い女であつたこゝを相察するに難くない。「綺語文章」に記する處に依るに、小湯女の



年齢は十三四歳より十八九歳までである。

## (四)

京畿に近い有馬温泉が、平安朝時代の末期より共同浴場となり、湯女なる特殊の賣笑婦が置かれて、江戸時代に至つてもなほそれがあつたことは前述の如くであるが、しかし今日の所謂風呂屋、湯屋なるものが都市の地に設立せられて、それを營業とする風の起つて來たのは、鎌倉時代以來のことである。文治承久頃の人なる信實朝臣の『今物語』に「板風呂云ふものをして人々入りけるが云々」とあるが、この板風呂なるものが果して營業的の浴場であつたか否かは明白でないにしても、文永三年日蓮上人が四條金吾に贈られたといふ書狀の中に「湯錢、草履の價」とあるを見れば、既に當時に於て營業的の共同浴場があつたことは明かである。

室町時代に入つてよりは、既に京都の町にも風呂が出来、湯女を置いたことは『太平記』延文五年の條に「湯屋風呂の女童までも云々」とあるを見ても分る。應永年代の頃に至つては、既に私人の營業に成る湯屋もかなり多く出来たらしく、その證として「看聞御記」應永二十九年の條に「藤井湯屋邊云々、只一字燒失、湯屋は無爲也」とあるに徴しても知れる。降つて天文頃に至

つては「錢湯」と云ふ名も生じ、「蟾川親俊日記」天文十一年の條に「博奕、錢湯、遊船、夜行、遠狩」の五種が擧げてある。

江戸に始めて錢湯が出来たのは天正十九年の頃で、市人は物珍らしさに押し寄せたこと云ふからこの頃までは江戸には共同浴場の設けが無かつたらしい。「そら物語」に「見しは昔、江戸繁昌の初め、天正十九年卯年の夏かよ。伊勢與市といひしもの、錢瓶橋のほりに錢湯風呂を一つ立つる。風呂錢は永樂一錢なり。皆人珍らしきもの哉とて入り給ひぬ。されどもその頃は風呂不鍛錬の人あまたあつて、あらあつの湯の雫や、息がつまりて物も言はれず、煙にて眼も明かれぬなご、いひて、風呂の口に立ち塞りぬる」とあるから、蒸風呂であつたことが分る。風呂屋が江戸に出来て次第に繁昌し、その數が増加するやうになつてからは、風呂屋女といふ私娼をその内に置いて、浴客より金を食ひ取る賣笑窟化して來た。「そら物語」に「今は町毎に湯屋あり、湯女といひて艶ける女共二十人、三十人ならび居りて垢をかき、髪をそぐ。さてまたその外に容色類ひなきさま優にやさしき女房ども、湯よ薬よといひて持ち來り戯むれ、浮世語りをなす一度笑めば百の媚をなし男の心を迷はす。これを湯女風呂と名づくといへり」とある。是れに由



つて之れを見るに、風呂屋には湯女といつて、浴客の垢をかき髪を梳る者の外に、容色の艶美なる女性をも置き、浴客に肉を賣らしめたので、即ち浴場に斡旋する湯女以外に、賣色を専門とする女性、即ち風呂屋女があつたのである。『そゞろ物語』は三浦淨心が慶長十九年以來、その見聞した事柄を次第に書き綴つたものであるから、『今は町毎に風呂あり』と書いてあつても、慶長元和の頃から、湯女、風呂屋女を置く風呂屋が俄かに出来たものは断定し難い。『異本洞房語園』には、『寛永十三年の頃より町中に風呂といふもの發興して、遊女を抱へ置き、晝夜の商賣をした』とあるから、寛永時代の中頃から出来たものと認めてよい。當時の風呂は朝から沸かし、晩は暮れ六つ時に終つたもので、この事は『落穂集』にも記する處で、夕刻頃より女共は身仕度を調へ、風呂の上り場に用ひた格子の間に座敷を構へ、金屏風などを引きまはして火を燃やし、衣服を改め、三味線を鳴らし、小唄やうのものを歌ひ、客を集めたとある。當時風呂屋女が流行したことは、寛永二十年版の『色音論』に、『吉原や夜の通ひの止みければ風呂屋女は流行りもの』とあるを見ても分る。

風呂屋女が繁昌した原因の主なるものは、寛永六年に當時流行した女歌舞伎が禁止されたので

風呂屋が美人を置き、その中にも丹前風呂の如きは勝山といふ美人を抱へ、歌舞伎を演ぜしめて大いに人氣を博するに共に、肉を賣らせたからである。『異本洞房語園』に風呂屋女の勝山のこゝを記して、『寛永の頃流行りし女歌舞伎の眞似なきして、玉ぶちの編笠に裏附きの袴、木大刀の大小をさし、小唄をうたひ、臺詞なき云ふ。その立ち振る舞ひ美事にして風體至つてゆゝしく見ゆしかなり』とある。此の如く風呂屋女が女歌舞伎に代り當時の人心に投じたので、盛況を極めたのであるが、その中にも丹前風呂は勝山の如き美貌の風呂屋女を抱へ置いた故、特別に繁昌した。『好色一代女』に『抑々丹前風呂と申すは、江戸にて丹後守殿前に風呂ありし時、勝山といへる女すぐれて情も深く、髪かたち取りなり、袖口ひろく、つま高く、よろづにつけて世の人に替りて一流。これより始めて後は持てはやされて、吉原に出世せし例もなき女なり』とある。風呂屋が盛況を極めるので、之れを羨むの餘り吉原の娼家の中には、その家抱への公娼を風呂屋に託し、それが露顯して嚴刑に處せられたものさへあつた。

されば、幕府は慶安元年風呂屋を禁止したのであるが、その効が無かつたので、之れを撲滅するよりも寧ろその増加を制限するこゝの急務なるを覺つた見ゆ、同四年には風呂屋看板の賣買



を禁じ、更に承應元年には風呂屋女は一軒三人に限るこゝ、他出を許さざるこゝ、風呂屋仲間へ女を融通すべからざるこゝを命じたが、しかし、その効果は擧らず、却つて益々風呂屋女が流行するがため、明暦三年幕府は意を決して、江戸町内に散在した二百餘軒の風呂屋を破潰し、始めて風呂屋女を掃蕩するこゝが出来た。かくして江戸の風呂屋女は、さながら火の消わたやうに亡びてしまつたが、併し根本的になくなつた譯では無い。文化七年版の『飛鳥川』に、「わけて元兩國若松町和泉屋と云ふ錢湯、近所の中にも宜しと云ふ。二階に煎じ茶出だすは何とぞや」とあるが、これに由つて觀るに、文化年代の頃から風呂屋に二階を設けて、其處に賣笑婦を置き始めたこゝが推知される。所謂湯屋の二階と云ふのが明治十二三年の頃まで東京にあつて、二三人の女を抱へ置き、近年の銘酒屋や新聞縦覽所と同じ有様であつたこゝは、今なほ記憶してゐる人も少くはなからう。

## (五)

管に江戸ばかりでなく、京阪及びその他の地にも、湯女、風呂屋女があつた。有馬の湯女は前に記して置いたが、江戸時代の有馬の湯女は、『守貞漫稿』に「今世も攝の有馬の温泉の坊と云ふ

旅宿には、各大湯女、小湯女あり、これは時に臨んで三絃をひき、小唄なき唄ひて酒席の興を添ふれども遊女賣色のこゝは無く、浴事を客に告ぐるを専するのみ」と記してあるが、果してさうであつたか否かは明白でない。『似我蜂物語』に有馬湯薬師の扉に書きつけるこゝあつて、「有馬山猪名の笹原いな言はじ一夜ばかりの契りなりせば」といふ和歌も出て居るし、「好色つれづれ」にも「風俗、しななき善き女は極つて三箇の色町にも限らず、當世にも有馬のふぢ、伊加保の江洲なき有りといへり」ともあるから、有馬の湯女にも美貌の者があつて、それが色を賣つたこゝも想像するに難くない。大阪の島の内には賣笑婦を置く風呂屋が少くなかつた。但し江戸に於けるが如くに、浴場のみを幹旋する湯女と賣笑稼業専門の風呂屋女との區別は無く、湯女が即ち賣笑婦であつて、それを垢すり女或は髪洗ひ女とも云ひ、また猿とも呼んだ。猿といつたのは垢をかきといふ意である。「好色一代女」に「風呂屋ものを猿と云ふなるべし、暮れ方より人に呼ばれける」とある。

『攝陽見聞筆拍子』に、延寶の頃、市中に垢すり女のゐた風呂屋が十四軒あつたこゝを記し、「南水漫遊」に「元祿の頃には額風呂にも湯女ありて小三と云ふ。その證とするものは、元祿年間の



冊子『風流文庫』といふものに、湯女の小三が垢をする所を畫きたる圖ありて、小三はその頓名高き湯女に見たり」を記してある。この小三を云ふは、院本に有名なる『小三金五郎』の小三のこゝで、『額の小三は心から、風呂屋のつぎめ引きかへて、同じ浮き身も品代る、茶屋の山衆の仲間入り』を『難波役者評判』にもある通り、彼女は一時は湯女であつたが、その後、島内の綿屋を云ふ妓樓の娼婦になつた。また同じく戯曲でその名を知られてゐる『三勝半七』の三勝も大阪島の内の湯女であり、また『心中天の網島』に描かれてゐる小春も湯女であつたが、その後新地に移つて娼婦になつたものである。それは『心中天の網島』の文句の中に、『南の風呂の浴衣より、今この新地に戀衣』とあるに徴して明かである。當時元祿頃の島の内には、柳風呂、額風呂等といふ風呂屋があつて、私娼の巢窟であつた。『好色訓蒙圖彙』には浴衣を着した湯女が湯の上り場て浴客の髪を梳る圖を掲げ、その風俗を記して、『風呂屋ものは、煤竹玉子色の木綿衣裳に黒半襟、籠甲の指櫛、襖高く袖寛かに、ひんしし、しやんとして物言ふも風俗やかましく、烟管手を放さず、酒ぶり節分に豆まくやうにして、投げ節調子高く、世繼會我の道行知らぬは無し』とある。大阪島の内の風呂屋は天保嘉永の頃には最早浴場の設けなき名ばかりの風呂屋にな

つてしまつたが、しかし、なほ風呂を以てその家號としてゐた。

京都にも賣笑稼業の風呂屋があつた。『榮花咄』に、『大盡に誘はれ、姉が小路の和泉風呂に入相の頃より行きて、吹きて吹かれて、さつとあがり場に坐して云々。同じ心の友遊び、皆でなんほか物ぞありたけ出せし、二階に上れば、丸行燈、煙草盆、菓子盆を段々にまた氣が替つて面白か、りし後には祇園町、島の内、みな全盛のこゝ、なれり云々』とある。しかし京阪の風呂屋女も天保以後にはなくなり、大阪に於ては官許の遊廓たる新町の娼婦を除き、廓外の賣笑婦はいづれも旅宿の飯盛女の格で黙許されたものである。『守貞漫稿』に『昔は三都共に風呂屋女流行せしが、今世はこの賣色絶つてあるこゝなし』とあるを見ても、幕末時代には最早風呂屋女の跡を絶つたこゝが分る。

以上は風呂屋女のこゝに就いて叙説したのであるが、普通の湯屋、風呂屋に於ても、江戸は寛政の頃まで、大阪は天保の頃までは、男女の浴槽の區別なく混浴したものである。これが風俗に甚だしい害があるので、この時代に至つて禁止せられ、男女の浴槽を區別するこゝになつた。這般の事實に就いて左に述べるに先だち一言し度いこゝは、江戸時代の中期までは、なほ湯屋を風



風呂の區別があつたことである。

## (六)

今日では湯屋も風呂屋も同じ意味の名稱になつてゐるが、江戸時代の中期までは兩者を區別したもので、例へば承應年代の法令には、「町中湯屋風呂屋云々」とあり、これより以前の寛永の法令にも、錢湯錢風呂と明かに區別してゐる。湯屋(錢湯)は温水浴、風呂は蒸氣浴で、即ち風呂といへば蒸風呂のことを指したものである。湯屋は單に沐浴するだけであるが、蒸風呂では同時に垢をかいた。その證據には、「備前老人物語」に「風呂屋の竿に湯かたびら(中略)風呂をたく時、男二人板の間にて垢をかき」とある。

江戸では文化年代の頃、湯屋及び風呂屋の軒數六百餘軒もあつたことは「塵塚談」に記する所であるが、これより降つて天保年代の頃には「守貞漫稿」に因るに五百七十戸あつた。前述の如く寛政の頃までは男女の混浴であつたが、しかし風呂に入浴する場合には、湯具にて陰部を掩うたものである。「骨董集」に風呂櫃鼻禪のことを記して、「寛永正保の頃の錢湯の古圖を見るに、櫃鼻禪を結びたるまゝ風呂入りする體をゑがけり。昔は卑しき者も風呂に入るには必ず櫃鼻禪を放

こゝになし」といひ、「錢湯來歴」にも、「慶安の頃までは、男女共に洗湯へ行くに、別々に禪を持ち來りて之れをしめかへて湯に入る。上る時は淺き下盥にて洗ひ清めて持ちかへる。之れを湯もじと云ふ。その後、手拭にて前をかくし湯に入りしこゝとなりしが、下盥は天保の頃まで残りありしが、不淨さいひて近頃(安政)は無し」とあり、また「嬉遊笑覽」にも「男女共に前陰をあらはして湯に入るこゝはもじ無かりしこゝにて、必ず下帶をかき添へて湯に入る故、湯具といふ。女詞にては湯もじと云ふべし」とある。しかし、男女の混浴が風俗を害したことは言ふ迄もない。「親子草」にその一斑を記して「町家には前々より男女入り込み湯有之、また女中湯と云ひて女ばかり入候湯も三町に一軒位づゝあり候が、女の氣性によつて、女中湯は込み合ひ候て、やかましきなきと云ひ、男湯へ入り込み候者も有之、右につき猥らなるこゝも有之候由の處、寛政三年二月十五日より男女入り込み停止仰出され、乳呑兒の外、女一切入り申間敷旨、被仰渡候」と記し「寶曆現來集」に「寛政の初め男女の入り込み停止せり。この入り込みは毎日夕七時より男湯入り込む故、騒々しく、それより最寄りの湯屋仲間申し合せて、月に六日づゝ日割り女湯と申すこと始めける」とある。



しかし、茲に一言するの要あるは、男女共に禪をつけて入浴したのは、風呂即ち蒸風呂のみに限られたことである。「しかた咄」に、「下帯ほぎ、ついひな、要らぬものはない。かくこも難しい。されども風呂へ入る時は下帯をかゝねばならぬ。兎角風呂を法度にしたい」もあり、また「備前老人物語」にも、「風呂屋の竿に湯かたびら、わり下帯數多をかけて置き云々」もある。見ても蒸風呂に入るには下帯即ち禪をつけたことが明かである。之れに反して錢湯、即ち湯屋では必ずしも禪をつけたものは思はれない。「みをつくし」に延寶の頃、木村屋抱への越中いふ遊女がある時、揚屋で我が相方の客が下帯を脱して湯に入らんした時、その姿が見苦しめて俄かに思ひつき、自分の湯もじの緋ぢりめんの二布を解き放し、それに紐つけて與へたので、この風を越中禪といふさあるを見ても、湯なればこそ風呂禪をせずに入らんしたのを、斯くも取り計つた婦女の床しい情が、當時の花街の佳話に上つたのである。元來垢をかくのは専ら蒸風呂ですること、普通の湯風呂ではせぬことである。それ故、蒸風呂では下帯をしめて入浴する風習になつたものゝ解せられるが、湯風呂では單に沐浴する許りであるから、必ずしも着禪するの要は無い。今日下層社會の男女が入浴するのを見ても、庭前に盥や桶を据ね、裸體で沐浴する無難作なる有

様より考へるに、湯屋に入るものが、いづれも禪をつけたことは思はれない。寛永承應頃の法令には湯屋風呂屋を區別してある。然るに後世に至つて蒸風呂がいつしか廢れて、湯屋のみ専ら行はれるやうになつたので、下帯をつけずに眞つ裸のまゝ入浴する風が一般になつた。されば男女共に裸體になつて混浴したのであるから、猥褻行爲が浴場内に行はれたことは自然の數であつて、江戸では寛政、大阪では天保の頃に、男女の混浴を禁止するに至つたのである。「守貞漫稿」に「京阪にも従來男女入り込み云ひて湯槽を分たず、一槽に浴することなりしを、天保府命後、男槽女槽を別つ」もあり、「江戸も先年は男女混浴にて槽を別けず。松平越中守老職の時より別槽の官命ありしなり。然らば寛政以來混浴禁なる」もある。

今日に於ては、公開の共同浴場に男女が混浴することは、絶對的に禁ぜられてゐるが、旅館や温泉地の浴室浴場の中には、依然として男女の混浴が行れ、淫靡放縱を極めて居る處も尠くない寶塚の特別湯、家族温泉の如きはその好例であつて、如何に温泉場の風紀を亂しつゝあるかは茲に絮説する要も無い。兵庫縣の官憲が今に至るも之れを放任する寛大の措置に對して、私共は惟訝の念に堪へない。



抑々江戸時代に於ては、天保十二年男女の混浴を嚴禁したのであるが、なほこの禁を犯す營業者があるので、時々戒告を加へた。しかし明治の初期に入つてもこの風が廢絶しなかつたがため、明治五年四月、各府縣の布令で、「男女入り込み洗湯不相成事」を以て、次いで同年十一月に公布された違式註違條例には、湯屋渡世の者で男女入り込み入浴せしめる者は罰金を追徴される規定となり、その後湯屋取締規則が發布されて、男女の混浴を禁じたが、今日實施されてゐるのは明治三十三年五月内務省令、營業湯場の風紀取締で、「客の來集を目的とする浴場に於ては、十二歳以上の男女をして混浴せしむることを得ず。前項に違背したる營業者は二十五圓以下の罰金に處す」と規定してある。營業浴場たる寶塚温泉が、所謂家族温泉或は特別湯の名の下に高價の浴料を徴取し、男女を混浴せしめて風紀を害してゐるのは、隨かに營業浴場風紀取締令に違反するものである。敢て當局者の果斷を促したい。

## 縁結びの神の本體

(一)

古來出雲の神は縁結びの神と稱せられ、毎年十月には諸神が出雲の大社に集つて男女の縁を結ぶと傳唱されてゐる。「俳諧歲事記」にある「神つゞひ櫛にあたる風あらし」、「都出で、神も旅寢の日數かな」、「神無月留守守れ宿の福の神」、「神迎ひ水口たちが馬の鈴」等の俳句は、いづれも這般の説話に因んで詠んだものに外ならない。さりながら出雲の大社の祭神は古史に明記するが如く建國の祖神大國主命であつて、八千矛神、葦原醜男神といふ別名のあるほゞ勇武なる英雄神であるのに、それが男女の縁を結ぶ神様と信仰されてゐるのは實に辻褃の合はぬ話である。尤もこの神には、須勢理媛や沼河媛との艶福な傳説があるが、しかしこのやうな傳説は大國主命以外の諸神にもあることであるから、之れによつてこの神を縁結びの神とするには、その根據が極めて薄弱である。されば、出雲大社の祭神たる建國の英雄神大國主命を縁結びの神と看做することに於ては、必ずや何等かの間違ひから起つたことに違ひない。それに就いて先づ第一に考へられることは、既に平安朝時代の初期の頃より出雲杵築大社の祭神を以て素盞鳴命とした誤解である。素盞鳴命が出雲の簸の川上で、大蛇を退治して櫛稻田姫と結婚せられ、新しい宮殿を造つて姫と住居を定められた時、美しい雲が八重に棚引いたので、「八雲たつ出雲八重垣つまごめに八



重垣つくるその八重垣を』といふ歌を詠まれ、それが我國に於ける和歌の始まりと傳へられてゐることは周知の事實であるから、この傳説によつて素盞鳴命を縁結びの神と仰ぐことゝなつたこと云ふ解釋は、滿更根據が無いことでない。さりながら、素盞鳴命も荒々しい武勇の神様である。高天が原に於て非常な暴行を働いたがため、放逐せられて出雲國に天降られたと言はれてゐる程の荒振る神である。稻田姫と結婚して出雲八重垣の和歌を詠まれたといふ戀愛説話があるにしても男女の縁を結ぶ神様としては、あまりに優し味に缺けてゐる神様である。

抑々出雲大社の祭神を素盞鳴命と思ひ誤つたのは、平安朝時代の初期に出た偽撰の史書『舊事本紀』がその嚆矢で、降つて鎌倉時代に刊行された『平家物語』にも、素盞鳴命が出雲に流されて大社の神になつたものゝやうに記され、室町時代に至つてもなほこのやうに誤解されてゐたことは、松永貞徳の文集に、『大社と申すは、天照大神の御兄弟、素盞鳴命に御座候』とあるを見ても明かである。江戸時代に入つても、林羅山の如き博識の學者さへ、その著『本朝神社考』に於て、『余案、素盞鳴、建出雲清地宮、娶稻田姫、生大日貴、以手摩乳、脚摩地爲其宮首、則大社爲素盞鳴亦有所施歟云云』と説いてゐる。されば寛文の年代に、毛利大膳大夫が出雲大社の社前に

建立した青銅色の鳥山の刻文に、『日神者、天照大神、月神者、月讀尊、素盞鳴尊、雲陽大社神也』と銘記したのも、思へば異にするに足らない。

然らば何が故に此の如き誤傳誤解が起つたか云ふに、それは容易に説明することが出来る。出雲の國造が遠祖天穗日命以來、大國主命を祀つた出雲杵築の大社に奉仕してその祭祀を司掌し今日に至るまで連綿として神職にあることは、人の熟知する處であるが、上古時代に於ては、出雲の國造神官たると共に出雲の領主であつたから、その政廳のあつた意宇郡内に鎮座する熊野大神、即ち素盞鳴命をも尊崇して祭祀してゐたのであつた。處が、平安朝時代の延暦以來、國造は意宇郡領の職を離れ、杵築に遷るやうになつたので、杵築の大社に於て同時に熊野大神をも奉祭することゝなつた。『舊事本紀』に素盞鳴命が杵築の神宮にも祭られて居ると記してゐるのは、蓋し此の如き原因から起つたことである。斯くして國造家より離れた熊野大社は次第に衰へて遂に大社の名を失ひ、平安朝末期の長寛勅文頃に至つては、素盞鳴命を熊野杵築神と稱して、嘗て兩社の別のあつたことを忘れるやうになつてしまつた。この間に於て『延喜式』には、出雲風土記の御魂社を大穴持神社と改名して、元の杵築大社の神をこの社に祭つたので、杵築大社は主とし



て素盞鳴命を祭る社に信ぜられるに至つたのである。(喜田貞吉氏「出雲大社發神考」参照)

(二)

此の如く出雲大社の祭神を素盞鳴命と誤傳誤解するやうになつてからは、更に出雲八重垣の神話と結びついて、出雲大社を縁結びの神と思ひ誤らないに限らない。否、現に出雲の松江の田舎の出雲郷村に云ふ處には、八重垣神社といつて素盞鳴命と稲田姫を祭る縁結びの神社がある。但しこの八重垣神社は「延喜式」にも「神社殿録」等にも見當らない社名であるから、恐らくは近世に至つて、出雲大社の株を奪はんがために好事家が設立したものであらうが、しかし素盞鳴命と稲田姫とが夫婦の縁を結ばれ、八重立つ出雲八重垣の歌を詠まれたと云ふ傳説に基いて八重垣神社と命名し、縁結びの神社たることを標榜してゐるのは、その一面に於て祭神を素盞鳴命と思ひ違へられた出雲杵築大社が、古來より縁結びの神と看做されてゐるこゝの傍證として注目すべき値がある。

さりながら、素盞鳴命を以て縁結びの神と看做すが如きは、固より輕卒な獨斷であり、偏見である。若しそれが許されるならば、木華咲屋姫と縁を結ばれた瓊々杵命も、豊玉姫と夫婦なられた彦火々出耳命も、また縁結びの神たる資格がある。何も獨り素盞鳴命のみに限らない。況んやこの神には一面に於て婚姻神話があるにしても、元來荒々しい勇武の神であつて、男女の縁を結ばれるやうな優しい艶つばい神様ではない、出雲大社の祭神をば素盞鳴命と看做したのさへ飛んでもな。間違ひであるのに、なほも縁結びの神とまで信ずるに至つては實に二重の誤解である。同じ出雲の松江に出雲郷村にある八重垣神社の如きは、前述の如く素盞鳴命の婚姻神話に基づいてこの命と稲田姫とを祭神となし、縁結びの本来本元と稱して、出雲大社の株を奪はんとする俗社に外ならないのである。同社は毎年四月に大祭、八月に例祭を催はし、四月の祭には男女二神の光臨があるに云つて、境内の二本杉の下で神官が神迎へをする。遠近より賽客が雲集し境内は勿論、村中は煮わくりかへる程の騒ぎ、こゝに八月の祭は夜通しの賑ひである。境内には「縁結びの池」と「夫婦竹」といふのがあつて、それに男女が良縁の祈願をこめるのである。しかし、この八重垣神社は近世に至つて好事者或は狡獪の徒が拵へたらしい、かさま神社で、同じ出雲國にあつても古來縁結びの神と信ぜられてゐる出雲の神とは全く別物である。

私の見る處を以てすれば、出雲大社の祭神を縁結びの神と信ずるやうになつたのは、京都の出



雲路にあつた道祖神(生殖器神)が、同じ出雲の名を冠してゐる處から、彼我を混同して、本當の縁結びの神たる道祖神を、方角違ひの出雲大社の神に間違へた輕卒無識から起つたことである、仍つて之れに關する考證を少しく左に述べて見よう。

(三)

我國には夙に古來より生殖器の形象に類した自然石、或は之れを刻した木石及び金屬をば、道祖神、幸の神、猿田彦命等と稱して開運、除厄、縁結び等を祈願する生殖器崇拜の風習が行はれ地方に行けば今もなほこの風習を見るこゝが尠くない。京洛の出雲路といふ處に祀られた幸の神道祖神は出雲路の神と稱せられた生殖器神で、その神體は「雲根志」に「洛の今出川の邊に幸の神といふ小社あり、これまた神體は陽石なり」とあるに徴して明かなるが如く、男根を刻した石であつた。

出雲路とは、京都今出川の上、一條の北、加茂川に沿つた一帶の地で、出雲河原といつたのを略して出雲路と呼んだ。この處に祀つた幸の神即ち生殖器神の由來は實に舊いもので、「和漢三才圖會」には、「往昔普京極一條大路、朱雀院天慶二年遷出雲路京極」とあり、「鹽尻」には、「朱雀院の

御時、始めて俗に祭れるこゝく扶桑略記に記せり。後世の淫祀にして、桓武帝の御時祭りしは非なり」とあるのを見るに、夙に平安朝時代より祭られてゐたこゝが明かである。それが出雲路の神と稱せられ、縁結びの神として信仰されたことは、「會我物語」の中にある「すづもぢの神に誓ひて淺からず妹背の中は變らじきこそ」といふ和歌が之れを立證してゐる。そしてこの神は一に出雲路の道祖神と稱せられて世に判評が高かつた。それは「源平盛衰記」七卷の笠島道祖神の條に、「奥州名取郡笠島の道祖神に職殺されにけり。實方、馬に乗りながら、彼の道祖神の前を通らんをしけるに、人諫めていひけるは、この神効驗無雙の靈神、賞罰分明なり。下馬して再拜して過ぎ玉へといふ。實方問うて云ふ。いかなる神ぞと。答へけるは、これは都の加茂の河原の西一條の地におはする出雲路の道祖神の女なりけるを、いつきかしづきて善き夫に合せんをしけるを商人に嫁ぎて勸當せられて被追下玉へけるを、國人之れを崇敬して神事再拜す。下男女の願ある時は、隱相を作りて神前にかげかざり奉りて之れを祈り申すに、叶はずといふことなし云々」ある記事や、また今川貞世の「道行き振り」の中、播磨は飾磨あたりの光景を描いた條下に「川のほとり近く石塚一つ侍り、これは神のいます所なりけり。出雲路の社の御前に見ゆる物のかたき



縁結びの神の本體

も一つ二つ侍りしを、何ぞ尋ねしかば、此の道を始めて通る旅人は貴きも賤しきも、必ず之れを取りもちて石の塚をめぐりて後、男女の振舞のまねして通るこゝ、申ししが、いこ片腹いたきわざにてなん侍りしかな云々」もあるのを見ても、如何に出雲路の神が世に名高かつたかを推知するこゝが出来る。されば江戸時代の醫家で且つ文士の橋南翁も、その著『東遊記』の中に、東北地方に於ける生殖器崇拜の習俗を記述した條下に、「京都の今出川の上にある所の幸の神云ふは如何なる神にいたしますや」と説き及んでゐる。

此の如く京都の出雲路にある縁結びの神、幸の神が世に名高かつたので、いつ頃よりかは判然しないが、京都の出雲路が出雲國の出雲に混同されて、建國の英雄神大國主命を祭祀する出雲大社が端なくも縁結びの神様と看做され、果ては毎年十月諸神が出雲大神に集會して男女の縁を結ぶといふやうな俗説訛傳をも生ずるに至つた。縁結びの本家本元は生殖器神なる京都出雲路の幸の神であるのに、出雲といふ地名が同じ處から、案外にも遙か遠方の出雲國の杵築大社の祭神に混同されて、今に至るも良縁を祈る賽客が大社に押し寄せて來るのには、大國主命もさぞかし御迷惑であらう。笠森の稻荷が發音の同一なるがために瘡守稻荷と轉訛されて、微毒の神様となり

大阪服部の天神はその神像が壽であるので、「かきゑ」の天神と呼ばれてゐたのが、いつの間にか『かきゑ』が「かつけ」と轉訛して脚氣の神様となり、明石の人麿神社の「ひこまる」が「人生る」と轉訛されて、安産の神様となつたのと同様に、出雲といふ名の同じ處から、生殖器神なる出雲路の幸の神が、出雲の杵築大社の祭神と混同されて、大國主命が縁結びの神とされたのは大のお茶番である。



昭和五年三月十八日印  
昭和五年三月二十三日發

行 刷

愛と殘酷奧付

定價 金貳圓貳拾錢也

不 許 復 製  
版 權 所 有

著 者 田 中 香 涯

編輯兼 發行 者 佐 伯 光 俊  
東京市神田區南甲賀町八番地

印 刷 者 橫 山 喜 助  
東京市神田區美土代町二ノ一

印 刷 所 活 文 舍  
東京市神田區美土代町二ノ一

發 行 所

有 宏 社

東京市神田區南甲賀町八番地  
電話 神田(25)二六四六番  
振替口座東京七四五〇五番



終